
魔血吸の在り方

羊妨害者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔血吸の在り方

【Nコード】

N6764Z

【作者名】

羊妨害者

【あらすじ】

メチャクチャな不幸に襲われた僕は、気付けば異世界に居た。初っ端から最悪な自体が襲ってくるけど生存本能全開でなんとか生き延びてやったぜ！ってあれ？なんか体が変わるんだけど・・・もしかしてこれって・・・！？

僕の終わりと始まりについて（前書き）

処女作です、どこるか初めて物語を書きます。

小説家になろうさんに書かれた作品がおもしろかったので、皆様の暇つぶしに貢献出来ればと思い書いた作品です、拙筆な上、筆に任せて書いているので、それでもよいという方はどうぞ、お読みくださいませ。

僕の終わりと始まりについて

目を覚ますと世界が逆さまになっていた

足の方に木々が伸び、その先に空がある

頭上に地面があり、とても質の良さそうな腐葉土もそこにあった

そんな中、寝ぼけた頭で色々考えた挙句、僕は呟いた。

「じじ、・・・どじじ?」

それが異世界に来て初めてのセリフだったことを、僕はまだ知らない

< 魔血吸の在り方 >

そんな訳で、段々と晴れていく意識の中、徐々に自分の状態が理解
出来てきた

僕はどうやら背の高い木の枝にズボンが引っ掛かって、逆さ吊りに
なっているようだ

もちろんそういう事が日常的に起きるほど、アグレッシブな人々が僕の家の周りに住んでいることはない（僕はそう信じている）し、当然僕にも逆さ吊りで寝る趣味はない。

そうなつてくると、自然に、意識がなくなる前のことについて考えはじめる。

そこで僕は思い出した。

「そうだ、僕は・・・何故か海外旅行になつた修学旅行で飛行機に乗つてる途中にハイジャックにあつて何故か僕だけ見せしめに殺されかけたところをなんとか反抗し、反撃し、遂に無力化に成功しかけたところでハイジャック犯の最後の抵抗で扉から突き落とされ太平洋の真ん中にヒモ無しバンジーしてなんとか海にうまく飛び込んで水面に浮いていき、遠くに見える無人島に流されながら泳ぎながらなんとかたどり着き、水源を確保して食料を探し、大丈夫そうに見えたきのこを食べたとたん苦しくなつて意識がなくなつたんだ」因みにそのきのこは猛毒であつた

・・・我ながらありえないな、うん

思い返せばここ数ヶ月は不幸のオンパレードだつた

マンションの上から植木鉢が降つてきたり（額にかすつた）トラックがつつこんできたり（後頭部にかすつた）人間違いで殺されそうになつたり（脇腹に包丁がかすつた）何故かマンホールの蓋が開いていたり（指が引つかかつて助かつた）などなど・・・

細かいことを入れれば百はあつたんじゃないかな、うん

父さんが僕に常々「何があっても生きる、生きてさえいればいい」と言っていてこなかったら、最初の数回で諦めていただろうな

しかしまあやれやれである、結局のところ僕は死んだのだろうか？

別に天国や地獄に行くとはまでは思わないけど、いきなり森の中とはこれいかに

もっと分かり易く「あなた死にましたよ」って言うてくれないと懺悔のしようもない

いやこの思考こそ、本当に仕様のないことなのかも知れないけど・

と、そこで枝がピキピキと音をたてているのに気がついた

（あ、これは折れるな）っと思う間もなく枝は折れ、頭が地面に吸い込まれる

異常に鈍い体を何とか動かし頭を庇うが、思った程の衝撃もなく地面に落ちた

そこでようやく僕は体を動かして辺りを見る気持ちになった

どうやら森のかなり深い所らしく、人の気配など微塵もない

僕が死んだ（？）はずの無人島はこれほど背の高い木々はなかったように思うし、なにかが足を踏み入れた形跡すらない

そう、僕の足跡すらないのだ

よってここはあの無人島ではないはずだ

他の可能性を考えても、あれほどの高さに僕を引き上げる動物なんているはずもないし、いたとしたって地面に何かしらの跡が残るはずだ

あるとすれば人為的に行われるぐらいだが、それこそメリットがなさすぎる

うむ、このミステリーは僕には解けそうもない

解けないこと、分からないことは後回し

テストという関門を毎度ぐくり抜ける日本学生にとって必須のスキルだ

しばらく辺りを歩いてみるが、特に何も無い、いや、あるにはあるが、素人では判断のつかない事ばかりで意味を見出せない

ここが安全である保証は全くないので、早急に移動しなければ

因みに動物はいるようだ

鳥(?)の声があちこちから聞こえてくるし、虫もいる

獣道のようなものも見つけたし、縄張りの主張のために傷つけられた木も見つけた

傷の位置は大体下から2mぐらいの位置だ

・・・やばい、これはつまりその位置に傷をつけることができる動物がいるということだ

熊だとしたら絶対になわなない、死んだふりは効かないらしいし

兎にも角にも移動しなければということ、僕は太陽(?)の位置を方角の基準にすることにした

太陽(?)の方角は登りぎみで、逆は下りっぽかったけど、僕は太陽(?)の方角に向けて歩くことにした

先ほどから太陽に?が付くのは確信が持てないからだ、もしかしたら地球にとって月にあたるものかもしれないし、沈んだり昇ったりするのもわからない

・・・しかし面倒なので、僕は太陽(?)を太陽だと思い込むようにしよう、私がそう思うからそうあるのだ、って昔の偉い人も言うてた気がするし

水場を探すなら降りるべきだけど、この場所の状況が知りたい僕はあえて登ることにした

本当なら木に登って辺りを見渡せばいいんだけど、現代の高校生にそれを求めるのは酷である

そんなこんなで登り始めて2時間ぐらい、一向に見晴らしがよくなる心配がない

太陽も低くなってきた、このままいくとこの人工物の一切ない場所
で野宿である

流石にあぶないよな、寝て起きれませんでしたじゃ洒落にならん

ちょっと登り始めたのを後悔し出した頃、木々の切れ間が見えた

少し駆け足でたどり着くと、そこは崖になっていた

・・・絶句するほど美しい景色を、僕は人生で初めて見た

夕日が赤く染めあげることでの周りの山々は、その威厳をさらに強く
し、木々に何とも言えぬ色彩をあたえていた

澄んだ空気はどこまでも見渡せて、夕日の下にわずかに海が見えた

ちょうど僕が立っている場所の真下が川の初めにあたると、そ
こから川は蛇行しながらも確かに海に続いている

雲は流れ、風が吹き、僕は人生で初めての感動に酔いしれた

(山に登る人はこれを求めていたのか)と、なんとなく知った風な
事を思い描いていると、川の途中に橋が架かっているのが見えた

その辺りを注意深く見ると、右側に人工物のようなものがわずかに
見えた

よかった！人がいる！と、歓喜をあげようとして思い出す

(夜、どうしよう・・・?)

村に着くまでにどう考えても日が沈む、というか2、3日はかかりそうだ

日が完全に沈む前に寝る場所を決めなければいけない、サバイバル経験皆無の僕にだって分かることだ

一旦森の中に戻り、良さそうな場所がなかったか思い出す

(あそこは落ち葉がたくさんあったから、それに埋もれて寝れば安全かな?それともあの岩場の隙間で寝た方が・・・)

などと考えていても、先ほどの景色が頭から離れず、つい振り向いて呆けてしまう

(いつか、いつかもう一度行こう)

そう考えていると、背筋が凍るような、嫌な予感が僕を襲った

僕はとっさに、後ろに倒れるように回避行動をとろうとした

死ぬ直前に起きた百を越える不幸が、彼に第6の感覚を与えていたのである

瞬間、右腕に強い衝撃

左肩から倒れこみ、前転をするように受身を取りながら、予感の正体を確認する

そこには3mを越える背丈の怪物がいた

人の形をとってはいるが、体の大きさや手足の指の本数、グレーに近い体色、何より赤い、瞳のない目が人でないことをありありと証明していた

と、そこで、怪物の指先に赤いものが付着しているのに気がつく

おそらく人の血だろう、かなり新鮮で乾いておらず、付いて間もないことが伺える

その段階でようやく気がついた、右腕の感覚が全くない

恐る恐る見てみると、僕の右腕は二の腕を1/5程残して消えていた

僕の終わりと始まりについて（後書き）

勢いで書いてしまった、今は反省している

私は昔から執筆活動に興味があつて、書こう書こうと思つていただけど、どうにも億劫で遂に今にいたつてしまいました。

この作品は、そんな自分の背中を押すために書いた作品です。

つまり見切り発車です。

ですので、いきなり更新がなくなったり、展開がおかしくなったり、数々の矛盾があると思いますが、なんとか完結させてやりたいと思つております。

どうか生暖かい目で見守つてやってください。

感想なんかを送ってくださるととても嬉しいです、厳しい意見もどんとこいです、よろしくお願いします。

怪物の在り方（前書き）

とりあえず投下、誰かが読んでくれたらうれしいです。

怪物の在り方

「つつつ………!!!」

危うく叫びそうになって、何とか声を押さえつける

相手は見たことも聞いたこともない化け物、叫ぶ事で警戒させる事が出来るかもしれないが、それが発端になってすぐに殺される可能性の方が高い

命の危機に瀕したことで、死んでから今までいまいち回転の遅かった頭が、いつもより速く回り出す

痛い、熱い、痛い、嫌だ、いたい、イタイ、アツイ、イヤダ、イヤダ、イヤダ、

左手で右肩付近を握り、一応の止血をする

右肩から心臓の鼓動に合わせて血が吹き出す、嫌な汗が全身から吹き出す

いやだいやだイタイイタイイヤダアツイイタイ

今までだってこんな絶体絶命を生き延びてきたんだ、大丈夫、きっと生き延びる可能性は残ってるはずだ！

太陽に向かって走り出す、と同時に化け物がこちらに飛びかかってきた

イタイイタイイヤダイヤダナンデイヤダイヤダツライイタイ

体の大きさに見合わずとんでもなく速いつ！僕の全力疾走の2倍ぐ
らいの速さだ

木々を盾にしながら、できる限り不規則に走り太陽を目指す

イヤダイタイいたいいたい痛いよう・・・

大量の出血のせいで頭がくらくらする

化け物は僕を追い詰めるよう、僕の通った跡そのままに着いてくる

大丈夫、しっかり冷静に考えればきつと生き残れる

時々背中に掠めるような感覚があるが、振り返らない

痛いよ、熱いよ、寒いよ、辛いよ、痛いよう

大丈夫、この先にきつとあそこがある

化け物の追撃を何度となく避けながら、目的地をようやく見つけた

僕は遂にあの美しい崖までたどり着いた

僕が振り返ると化け物がこちらを不満げに見ていた

大丈夫、勝負は一瞬だけど、速さは僕より少し速い程度、大丈夫

僕は自分に少し嘘を吐きながらタイミングを図る

・・・化け物が笑った様な気がした

瞬間飛びかかってくる化け物

僕は奴の股の下を滑り抜ける

野球のスライディングの要領で股下をくぐり抜け、化け物の尻目掛けて蹴りを放つ！

弱者が使う強者に勝つための常套手段、それは他の力を使う事

例えば敵の力、例えば重力、例えば相手の油断、それらをフルに使って初めて弱者は強者に勝てる

これで決まればよかったが、僕の蹴りは空を切った

僕が的外れの蹴りを放った訳じゃない

怪物が、僕の認識できる速度よりはるかに速く動いて視界から消えたのだ

音を使い右を向くと、やはり奴は笑っていた、僕を嘲笑っていた

そうだ、奴は僕が五感で認識出来ない程の速度で、僕の右手を奪っていた

これまでの追いかけてこは、奴にとってはただの遊びだったのだろう

駄目だ、失敗した、おわりだ、しぬ、しんじやう

ならば次は、さらにこの命を賭けるのみ！

僕は崖に向けて駆け出し、飛んだ

あの川の所に落ちれば、もしかしたら生き延びれるかも知れない

しかしその希望も、すぐに打ち砕かれる

いつの間にか怪物は僕の後ろに立っていて、飛んでいる僕の足を掴んだ

そしてそのままゆっくり振り上げ、反対の地面に叩きつける

咄嗟に左手で頭を守ったが、脳が揺れる、体が軋む、口の中に血の味が広がる

怪物は握っていた僕の右足を根元から握りつぶした

痛いいたいしぬしぬしぬしぬシヌシヌシヌシヌシヌ

僕は奴の手を左足で蹴り、反動で距離を取る

しかし怪物の遊びは終わったのか、即座に近づき拳を僕のお腹に向けて振り落とした

左足で拳に対抗しようとするが、難なく縦に押しつぶされた

その反動で少し距離が取れたが、もはや僕の命は風前の灯火、春の夜の夢だろう

僕は奴から出た僅かな血と噛み千切った皮を飲み込んだ

シヌ？しぬ？死ぬ？死んだ？もう死ぬの？死にたくない死にたくない

いや、我ながら最後の抵抗は見事だった、うん

なんてっ たって奴に血を出させたんだから、普通の人間にや出来ないぜ

よくがんばったよ僕、えらいえらい

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない

僕はゆっくり崖に向かって放物線を描く

崖の端に生えている木の枝の下をもうすぐ通り抜ける

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ！

・・・僕の本能はまだ諦めてないみたいだな

あの枝、手を伸ばせば届きそうだな

まあ伸ばす腕がないんですけどね

死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない！

腕があれば、もっとあの化け物に、痛い目に合わせてやれるのに

足があれば、もしかしたらあの化け物から逃げられたかもしれないのに

目に小さな小さな村が見える

あそこに住んでる人たちは、この化け物に対抗できるのかな

もし生きてたら、ここに危険な化け物がいることを警告できるのに
もっと強い腕があれば、もっと強い足があれば、もっと強い体があれば

・・・畜生、生きたいな

お腹の底が熱くなる、今の僕の顔は涙と鼻水でぐちゃぐちゃだろう

あの枝に届く腕が欲しい、あの化け物を蹴り飛ばせる足が欲しい、
無茶な行動に耐えられる体が欲しい！

死にたくない、生きたい、生きたい、まだ、生きていたい！！

気付けば僕は、枝を掴んでいた

怪物の在り方（後書き）

とりあえず主人公覚醒、次号待たれよ

一方的な在り方

脳が溶けそうになる程頭が熱い、意識が体を突き抜けたようだ

よく分からないけど、手足が元に戻ってる

化け物がこちらを見てる

だけど不思議と命の危機は感じない

世界はまだゆっくりなままだ

さあ、平穩を取り戻そう

化け物がそばにあった木をヘシ折って上段に構える

そのまま僕に向かって振り下ろしてくる

僕は右手を頭上に持ち上げて、防御の姿勢をとる

今までだったら無事で済まなかっただろうけど、今なら

振り下ろされた木は、僕の右手に当たり、そこで止まった

木が僕と化け物の間でたわむ

化け物はそのまま力を入れつつけ、遂に木が折れた

その折れてギザギザになった断面を僕に突き入れる

僕はその先端を左手ではたく

それだけで狙いがズレて、その突きは外れた

化け物は僕と距離をとり、木を上空に投げた

木は空高く舞い上がり、僕の方に落ちてくる

と、同時に化け物が駆け出し、僕との距離を詰め、必殺の拳をくりだそうとする

僕は木が落ちてくるまでの時間を、のんびりと待って、化け物が詰めてくるのを待った

そして、化け物が拳を放った瞬間、一步だけ前にでた

化け物の懐にはいった僕は、右手を化け物の胸の中心に、突き立てた

化け物は何が起きたのか分からない様だった

木が地面に落ちる大きな音がする

僕が、右手を捻りながら抜くと、化け物は三步下がって膝を地面に

着けて、こちらを睨む

化け物は、最後の抵抗とばかりに走ってくる

僕はその頭を蹴り上げる

パンツという音と共に、怪物の頭が血飛沫に変わった

化け物はまるで僕を抱きしめるような姿勢のまま、僕に倒れかかり

やはり僕を抱きしめずに倒れた

体中に化け物の血が着いているが、僕は唇についた血を舐めとって

そのまま意識を手放した

～近隣の村～

(・・・ん！？)

何か、とてつもなく大きな力を感じた

山の方からだった、見える範囲では異常はない

(ふむ?)

あれが魔法によるものだとしたら相当な規模だ

それこそ、山ごと村が吹き飛んでもおかしくはない

視界に入らない程遠くの出来事とは考え難い程の力の大きさだった

私は全神経を集中しながら山の方を警戒するが、異常は感じられない

・・・思い過ごしだろうか?

今の世の中、何が起きてもおかしくない

警戒のし過ぎと言っことはないだろう

今後、今少し警戒を強めよう

・
・
・
・
・
パ
パ
?

〜
?
?
?
?
?
}

一方的な在り方（後書き）

え、実はこれで最終回です

嘘です、ここまですがプロローグです

まだがんばります！

ここでの在り方(前書き)

投下だぜ!

「」での在り方

・・・？

・・・さ、寒い・・・？

・・・けど、もうちょっと寝ててもいいよね

もうちょっと・・・

そういえば、布団はどうしたんだろ？

地面も若干固い気がする・・・

まあいいか、お休み・・・

・・・

そういえば、怪物はどうなったんだっけ？

・・・ん？怪物？

「のわああ~~~~!!?」

一気に目が覚めた、そんな朝的一幕

叫んだ僕は急いで周りを見渡すが、怪物らしきものはいない

(ふう〜〜・・・)

とりあえず一息つくが、心臓はバクバク、大爆発寸前だ

(でも、死体らしきものすらないのは何でだ?)

不思議な事に、怪物の死体は消えていた

(もしかして、・・・夢?)

怪物がヘシ折った木の跡があったので、全くの夢ということはないだろうけど・・・

それに・・・

「この腕、どうなってるんだ・・・?」

そう、僕の腕は怪物と同じグレーの色をしていて、体との接続部分はグレーと肌色で複雑な模様を描いている

足も同様だ

とにかく、状況を整理すると

- 1、あの時僕は怪物に出会い、命からがらこの崖まで逃げてきた
- 2、両手両足を失いながらも反撃し、逃亡を試みたが、あえなく崖に放り投げられる
- 3、突然手足が生え、何故か負ける気がしなくなって、事実怪物に

勝利

4、その後意識を失う

・・・ふざけてるな、特に3番目

つというか怪物だよ怪物、ありえないよ

あんな生物いたら普通にテレビで放送されるよね

もしかしてUMA？未確認生物？

いやいやビックフットは雪山に出るんじゃないよ

ていうかここいらの植物も見したことないものばかりだし

そつえば僕、どうしてあんなに動揺してなかったんだ？

いくら何でもいきなり宙吊りにされたらパニックと思うんだけど

さらに言えば木から落ちた時も衝撃が全然なかったし

そつだ、怪物つて1匹(?)なのかな？

あんなのが群れで襲ってきたら命がいくつあってもたりないよ！

次から次へと疑問が浮かんでは消えていく

だけど、その中で一番大事なことは

「……喉が乾いたあ」

これである

昨日は全く欲しくなかったけど、今はとにかく一杯の水が欲しい

そういえば、崖の下に川が流れていた筈だ

崖を覗いてみると、やっぱり川があった

というかどうなってるんだ？川が僕の真下から流れてる？

とにかくあそこに行けば、水が飲めることは間違いなさそうだ

（さて、行くにしても、どうしたもんだろうか・・・？）

崖は視界の端の方までずっと続いていて、迂回するのは億劫だ

普段なら絶対取らない手段だが・・・

（飛び降りる・・・か？）

今はこの腕と足がある

もしかしたら耐えられるかも知れない

とりあえず、垂直飛びをしてみた

プーン

・・・軽い擬音で表現し過ぎだけど、3mぐらい飛べた

正直、怖かったあゝ

しかし、崖下までは100m位はあるんじゃないかな・・・？

次はもう少し力を入れてみた

ビヨン

ドスン

10mぐらい飛べた、正直死ぬかと思った

・・・うん、いけそうダネ

僕は深呼吸を繰り返し、気持ちを落ち着かせる

大丈夫、大丈夫、いざとなれば川に落ちればいいんだ、大丈夫

深く息を吸って、軽く助走をつけて、飛ぶ！！

えも言われぬ浮遊感のあと、もの凄い速さで落ちていく、落ちていく

股の間がキュッってなった

けど、ある程度すると、崖の下の壁が近づいてきて

そこに手や足を突き出し、減速しながら落ちていくと、だんだん楽しくなってきた

横に回転したり、縦に回転したりして遊びながら落ちていくと、地面が近づいてきた

僕は空中で前転しながらタイミングを計り、手と足を地面に叩きつける！

当たりに鳥の飛び立つ音が聞こえる、キマった！

ズボンのお尻が破れている事に気づいたのは、それからしばらく経ってからだった

川は初め、少しだけ滝になっていた

崖の下の裂け目から流れ出ているようだ

水は日本でも滅多に見れないくらい澄んでいて、逆に飲むのをためらってしまった

しかし、一口飲んで、あまりのおいしさにガブガブと飲みまくった
鋭く冷たく、どこか甘い、世界の名水100に絶対エントリーすべきだ

結果お腹を下し、人生で初めて木に隠れて野ソをした

お父さん、息子はがんばって生きてますよ

そんなわけで、一息ついて、あらためて考える

いきなり森の真ん中にあらわた僕

襲ってきた怪物

生えてきた腕

全くもって分からないことだらけだ

幸いにも気温はそこまで低くなく、ここは影になっているうえに、短パンになってしまったズボンと、ノースリーブになったシャツや上着でも、ちよつと肌寒い程度で済んでいる

もしかしたら夏なのかもしれないが、有難いことである

あの怪物の返り血は、起きた時には跡形もなく消えていた、そこはラッキーだったのかも知れない

血染めの服なんて嫌だからね

そして一番気になることが、この地方に、いや、認めよう、この世界に僕の様な人間がいるかどうかだ

ここは、おそらく異世界なんだろう

怪物もでてきたし、腕も生えてきた、元の世界ではありえないことだ

あの怪物が、実はこの世界の人間にあたる存在で、崖の上から見たあの橋も、その脇の人工物も、全部あいつらが作ったとしたら

僕はどうやって生きていけばいいのだろうか？

とにかく、今、一番大事なことは……

グウ~~~~

一番大事なことは……

キュルルルル~~~~

一番大事なことは、腹が減ったということだ

1111での在り方（後書き）

少年の冒険が、始まる・・・

メリー・クリスマスですね

そう、今日はイエス・キリストが死んだ日

人の死を祝うなんて、お前ら人間じゃねえ！（タケシ風に）

知ってます、生まれた日なんですよ

私はこの3日間、仕事です

みなさんの幸せを願っています（＾3＾）／

サバイバルの在り方

前方80m、目標、補足しました

(それでは作戦を開始する、3、2、1、GO！)

僕はできるだけ静かに、そして素早く、手足をゴムの様にして目標に近づく

(ここでやらなきゃ、僕が死んじゃうんだ！)

決して気付かれてはならない、少なくとも攻撃範囲までは・・・

その時、目標がゆっくりとこちらを向きだした

(クソッ！こうなったら・・・！！)

僕は全力で足を踏み込み、

全力でコケた

派手な音がしたので、目標である犬っぽい猪はすぐに逃げ出した

ご飯を探して1時間、獲得数、ゼロ

「イテテテツ・・・」

僕はご飯を探しながら川沿いを、下流に向けて歩いていった

所々木の実や食べられそうな草、キノコなどが生えてはいるが、前世の死因がキノコの毒なので、とても食べようとは思わない

それにこの体なら、きっと簡単に動物が狩れると思うんだ

・・・思い上がりだったみたいだけど

普通に歩いたり、走ったりする分には問題ないのだけど、元の自分のスペックを越える力をだそうとすると、なかなか思う通りにいかない

力が強すぎるんだ

下手に踏み込むと地面が砕けて、思うように動けないし

ゆっくりでは当然、獲物に逃げられる

攻撃手段は考えてあるけど、それにしただって近づかなければ当たり前じゃない

獲物を見つけるのはそんなに難しいことではなかった

この体になってから、視力も上がっているみたいで、普段なら見逃すような動物でも気付けるんだ

と、そんな時、鹿っぽいのが川で水を飲んでいるのを見つけた

(よし、今度こそは！)

僕はもう、気付かれずに近づくの諦めた

もういつそのこと気付かれよう

気付いても逃げられないようにしよう

ある程度まで近づいて、

(いっせいの、せっ!!！)

全力で立ち幅跳びをした

やはりというか何というか、この体、化け物である

目測40m程の距離を、一気に詰めて、目標は目前である

驚いた顔をした鹿がこっちを見ている

(ここであせっちゃいけない、秘密兵器だ!)

僕は右手に集めてあった小石たちを、軽く振りかぶって、投げた

超常の力で投げられた小石の群れは、目標に向かって亜音速で飛んでいった

すぐに逃げの体制に入っていた鹿の後頭部にHIT!

(よしっ!! 僕が考えた必殺技、ロック・ショットガン碎石銃が見事に命中した!)

説明しよう、ロック・ショットガン碎石銃とは、当時中学生の僕が、もしすごい力を手にしたら、どんな技を使うかを考えた結果、コストと威力、命中率に

優れたこの技を思いついたのだ！

ありがとう、昔の僕！恥ずかしいぞ、昔の僕！

僕はガッツポーズを解くと、素早く獲物に近づくが

(あゝ・・・)

見事に顔が消えていた

威力が強すぎたようだ

兎にも角にも食べれる様にしなければ

(とりあえずは、血抜きかな?)

後ろ足を持ち、頭を下にして、木の枝に引っ掛ける

ここに来て僕の枝に対する好感度は急上昇である、枝loveだ、子供が出来たら名前に枝という文字を一文字入れよう

(そして次は、内蔵の処理か)

魚を捌いた時の知識で処理をしようとするが、生憎包丁がない

僕は川にある石をいくつか割って、鋭利な物を作り出す

こうやって作られた物を打製石器と呼ぶ

本来はこれを研いで摩製石器を作りたいとのだが、間に合わせなのでこれでいいだろう

ビバ！社会科の知識！

とりあえず人差し指と親指に思いっきり力を入れて、毛皮に穴を開け、そこを起点に捌いていく

お尻の穴まで開くと、デロンと胃と腸が出てきた

口の方の端を指で取り出し、肛門のあたりは怖いので、丸々千切り取り、そのまま少し遠くに捨てる

他の内蔵も、生で食べれるところがあると聞くけど、わからないので全部捨てる

次は、皮を剥こう

皮沿いに石器をいれると案外簡単に取れていった

足のあたりで止まったけど、面倒なので千切る

皮は川で洗って干した

もうそろそろ血抜きもいいと思ったので、肉を下ろして川で洗った

ぶっちゃけ作業中、何度か吐きそうになったけど、気合で乗り切った

っていうかなんでこんな真面目に解体してるんだろ？

これが日本人の性なのか

もったいない、もったいない

かまどは少し開けたところに適当に石で組んで、乾いた木を拾って
くる

動物が肉に寄ってきたので本気で威嚇する

かまどに木を組んで、真ん中に燃えやすそうな枯葉を据える

太めの木を手刀で割って、そこに枝を突き立て、回転させる

火おこしだ

最初は枝がすぐに折れて失敗

次は結構もったけどやっぱり失敗

そんなこんなで失敗しまくる

イラツときた

枯葉に木の粉をかけて、もう片方の割れた太い木を手を持ち

枝を突き立ててた木に、力任せに擦る、擦る、擦る！

流石怪物の力と言うべきか、少し火が出たのでそれを枯葉に近づけて火を大きくする

かまどに火が灯った

危うく満足しかけたけど、肉を適当な大きさに切って炙る

そして齧りつく

「う、うめええ〜!!?」

なんだこれ、何だこれ!?

この世で食べた肉の中で一番おいしい!

僕は焼く手間が億劫になってきて、燃料の枯れ木と共に、何本か枝を取ってきて、火で軽く炙ったあと水で洗い肉を刺す

そしてかまどで一気に炙る

これほど原始的な焼肉があるだろうか

夢中になって焼きつづけていると

(あれ? やっぱりそんなにうまくない? むしろ味がない?)

調味料を一切使わない焼肉の味の無さに気付きだすのであった

サバイバルの在り方（後書き）

*ここで表現されているサバイバルの仕方は作者の妄想です、
実体
験ではありません、注意してください

なるとなれば異世界だからでござんを

初めての異世界人の在り方

僕は虫が集まった肉を再度洗い、毛皮に包めるだけ包んで、残りは捨てた

その後、その場に手を合わせて川沿いを移動し始めた

とりあえず、橋を目指そう

僕は川の周りをピョンピョン飛びながら移動している

力が強すぎるので、普通に走るより、この方が効率がいいのだ

川が合流してだんだん大きくなる様を見ながら黙々と進んでいくと、日が沈んできた

この体なら今日中に着くかと思ったけど、上から見て思ったより、距離があつたみたいだ

ひらけた所を見つけたので、ここで晩ご飯にしよう

かまどを適当に作り、枯れ木を集め、適当なサイズに折る

木を組んで、枯葉を置き、木と木を擦って火をつける

肉を炙る、食う

最初の感動は何処へやら、味気ない肉をよく噛んで食べる

肉が少し臭くなっていた

（結構大きな鹿だったのに、明日はもう一度、今度はもっと小さめのを狩ろう）

肉を森に捨て、寝る場所を探す

ふと、怪物に襲われた事を思い出す

あの時は必死だったけど、思い返すと恐怖が蘇ってきた

あの時もし勘に任せて避けていなかったら

あの時もし怪物が最初からずっと本気だったら

あの時もし・・・

考え出すとキリがないので、頭を振ってその考えを頭から追い出す

木の上、見晴らしがいいひらいてる場所、大きな石があり盾にして逃げるのによい場所

色々考えた結果、茂みの中に身を隠すように寝ることに決めた

鹿の毛皮を体にかけて目を閉じる

風の音が聞こえ、木々のザワめきが聞こえ、時々何かの動物の鳴き

声が聞こえる

闇の中でもよく見える視力を手にいれたとて、それは恐怖だった

朝起きたらこの手足がなくなってるんじゃないか

実はあの怪物は弱いモンスターで、もっと強いモンスターがここを襲ってくるかもしれない

あの鹿の肉は毒性を持っていて、じわじわと内部から破壊されてるかも

頭の中が恐怖に支配される

目標を持って動いていた時は隠れていた恐怖が、体中を脅かす

あの鳴き声は、僕を見つけた事を示しているのかも

実はあの怪物は僕の中にいて、人格を乗っ取るうとしてるかも

もしかしたらこの夜は明けないかも

結局その夜は、あまり眠れず、うとうとしていたら夜が明けた

引き続き川沿いを移動する

偶にこちらを追いかけてくる獣がいるが、無視だ

あまりおいしくなさそうだったからだ

ちよつと大きめの兎のような動物を見つけたので、朝昼兼用のご飯にする

今度はうまくいったのか、殆ど生きていた状態とかわらない肉を手にいれた

炙って食べた、なかなかおいしかった

皮や余った肉は捨てた、手を合わせて後、移動する

速く、速く、できるだけ速く

それだけを思い移動する

最初に比べれば、天と地程の差がでるほどの移動速度だ

日が真上に登り、傾きだしたころ、ついに僕はたどり着いた

「橋だ・・・」

お世辞にも立派とは言えないけれど、川を渡れるように、橋ができていた

「人工物だ・・・！」

嬉しさを爆発させながら、橋に近づいて作りをみる

どうやら石を組んで、その上に丸太を乗せて作ってあるようだ

幅はバスが一台通れるかどうかという程度

橋の上に立ち、辺りを見渡す

そう、橋があるということは、

「道だあ〜っ！〜！」

道があるということだ

僕は迷わず上流から見て右に歩き出す

人にあつたらどうしようか？

僕は受け入れてもらえるだろうか？

そうだ、言葉は通じるかな？

鼻歌でも歌えそんな気分で歩き出す、急ぐ必要はない

もうすでに、目に見える所に村があつたのだ

そうしてだんだん大きくなっていく村に、ニヤけた顔が隠せなくなってきた時、それを見つけた

（人だ！）

怪物より遙に小さいが、僕より少し背の高い人が、門の入り口でこちらの方を見ている

僕は走り出しそうな体をぐっと抑えて、でも締まりのない顔のまま歩き出す

（よかった！人がいた！よかった！よかったあ！！）

近づきながら、初めはなんて言おうか考えていると、相手が僕を見ているのがわかる

村人Aの20m程手前に差し掛かった頃、向こうが話しかけてきた

「それ以上こちらに近づくな、この魔物めが！」

臨戦態勢の村人Aを相手に、僕の顔が凍りついた

初めての異世界人の在り方（後書き）

主人公、名前すらでてないのに、不憫です

というか魔血を吸ったのまだ一度だけです、次まではもう少しかかります、タイトル詐欺・・・？いやいや

村へ入る人の在り方（前書き）

一応ギャグパートです

村へ入る人の在り方

村人Aは、頭巾の様な物を被り、口と鼻を覆う様にバンダナを巻いており、顔だけ見ると忍者のようにもみえる。

服装はゆとりのあるズボンの裾を糸で絞め、動きやすくしており、上はタンクトップの様な物を一枚着て、腕を露出していた。

右足を前に踏み出し、左手を鞘に、右手を柄に掛け、今にも抜刀しそうな様子である。

「ま、待ってください、僕は魔物などではありません！話を聞いてください！」

村人Aは眉をひそめながら言う。

「ほう、人語を解すのか、しかしながら何をもってお主を魔物でないとする！？」

僕は必死になって考えて、まずは相手の認識を確認することにした。

「そ、その前に何故僕を魔物だと思ったのですか？」

「フン、そんな事は見れば分かる！まだ日も高いのだ、見間違っ筈がなかるう！」

いくつか思い当たる節があったので、聞いてみる。

「この腕のことですか？」

「確かに腕の色と顔の色が違うが、肌の色など関係ないわ！」

「では、髪の色ですか？」

「黒髪なんぞ何処にでもおるわ！」

僕は若干ヤケになって叫んだ

「鹿の皮を腰に巻いているからですか!？」

「いやそれはお主のセンス次第じゃろ……」

若干呆れられた

しかしもうこれ以外に、外観で魔物と満たされるような事を思いつかない

どうしようも無いので正直に聞いてみた

「では何故僕を魔物と思ったんですか!？」

「そんなものは目を見ればわかる！」

……え、このおっさんもしかして犬好きに悪い人はいないとか、そういう事を言っているのだろうか？
失礼だけど、ワシの目に狂いはないとか、直感で物事決めつけちゃうタイプなのだろうか？

そんなことを考えていると、おっさんが続けて言った

「その、血のような紅い目を見ればなっ！」

「えっ？」

訳がわからなかった、僕は典型的な日本人の外見だったはずだ
肌は黄色、髪は黒、瞳も黒く、背もそんなに高くない

「ちょっと待つてください！僕の目の色は黒ですよ！？」

「たわけたことを！その目は、その目の色は、儂が何度も殺してき
た魔物たちの目と同様の紅色ではないか！！」

思い出してみる、川で顔を洗ったときのことを

少し自分の目元が赤い気がしたが、川は常に揺らいでいてよく見え
ず、充血しているだけだと思った

その後すぐに頭を洗ったし、やることがあったので確認しようとも
思わなかった

こっちの世界に来たときに持っていた物は服だけだったので、鏡の
類で確認も出来なかった

僕の目が、紅い？

あの、怪物みたいに？

「しかし人語を解する魔物など、話にしか聞いたことがなかった、
そういつた魔物は隠れているか、やたらと強いと聞いたが、・・・
ん、おい、どうした？」

おっさんが何かを言っているが、僕はもう限界だった

この世界に来てから碌な事がない

いや、来るちよっと前からか

何故こつも理不尽な事が押し寄せてくるのだろう
僕はただ、普通に生活してただけなのに
ただ、普通に生活していきただけなのに
何故、何故、なぜ・・・
頭の中がぐちゃぐちゃになる
溜まりに溜まったストレスが、溢れ出す

「・・・っ！」

「どうしたんだ、ん？ヤルのか？いいぞ、かかってこい！この村は
儂が守るぞ！」

僕は膝を地面に着き、上を見上げ、

「びえええ~~~~ん！！！」

泣いた、そりゃもう盛大に
人目など知ったこっちゃない
もう限界だったのだ、色々

「お、おい、ほんとにどうしたんだ？わ、儂が悪いのか？」

「ウワア~~~~ン！ア~~~~ン！」

「うつつ、子供なんぞ育てたことがないからどうすればいいかわか
らん！カミさんに全部任せすぎたか・・・」

「ええ~~~~ん！ギャ~~~~ン！」

「ほ、ほら、怖くないぞ、ん、大丈夫だ、お主も男じゃろ？どつじ

「や、ここらで泣き止まんか？」

僕は泣いた、泣き続けた

おっさんが何か言ってるが取り合わずに泣き続けた

しばらくして段々と落ち着いてくると、おっさんが言っていることが聞こえる様になってきた

「悪かった、悪かったから、いったん村に入ろう、な？あんたは魔物じゃない、わかったから、な？」

「グスツ、グス・・・」

気づけばおっさんはすぐ近くにいたので、手を差し出す

「ん？手を引いていけばいいのか？そうか、とりあえず行こう」

おっさんに手を引かれ、歩き出す

ずっと下を向いて泣いていたのでよくわからないが、村に入り、建物に入ったようだ

「お〜い、客だ、宿を頼むっ！」

しばらくして足音が聞こえだした

「あらあらまあまあ、もう客は来ないもんだと思ってたよ、その子がお客さんかい？」

「ああ、門の前で見張りをしていたら、橋の方からやってきて、あまりに怪しいもんだから魔もん「グスツ」いや、こいつは人間だ、

うん

「なにいつてんだい、確かに不思議な形なりだけど、どう見たって人だろっ?」

「いや、村の見張りとしてはだな、あやうとにかく、客なんだろう?」はい、そうです」

「なら構わないさ、その若人!いらっしやい、ゆっくりしていとくれ」

久しぶりに、人の優しさに触れた気がした

村へ入る人の在り方（後書き）

補足として、おっさんの瞳は黒色です

おそらく次話に説明をいれます

駄目でした、その次に入れます

本当はもっと早く執筆したかったのですが、飼い猫に邪魔されました
おのれ、かわいい顔しておつて、かわいいじゃないか
その後、3時間程時間を盗まりました

おかみさんの在り方（前書き）

アクセス解析という物を知りました

200人以上もの人が、この小説を読んでくださってたと知って、
恥ずかしいやら嬉しいやらで大変です

もし気に入っていただけたら、今後ともよろしくお願いいたします。

おかみさんの在り方

泣き疲れた僕は、部屋に案内されるとすぐに眠りに落ちた

目が覚めた僕は、定番のセリフを言おうとして、

「知らない天井・・・でもないのかな？」

やっぱりやめた

たかだか3日ぶりだというのに、随分久しぶりにゆっくり寝た気がした

ベットは元の世界程柔らかくないが、地べたとは雲泥の差だ
体が少し痛いのは、多分別の理由だろう

「ん〜・・・っ！はあっ・・・」

僕は伸びをして窓を見た、もう日が昇り始めてるみたいだ
ドアを開けて、廊下に出て、階段を目指す

壁は煉瓦で、日本にはない情緒が感じられる
二階の部屋から一階に降りる

そこで、この宿のおかみさんに出会った

「おはようございます」

「あら、おはよう！随分とよく眠れたみたいだねえ、顔を洗うなら
そこの角の扉から出て、直ぐにある井戸を使っておくれ」

「いやあ、ありがとうございます」

よく考えると、日が沈む前に寝て、日が昇ってるってことは、12時間以上寝ていたってことか
そりゃあ体も痛くなる訳だ

井戸は滑車が付いていて、ロープの先のバケツを下ろして、水を汲みあげるみたいだ

バケツの水を桶に流し入れて、顔を覗き込むと自分の顔が写っていた
その顔は泣き腫らしてむくんでいたが、その瞳は、

「ははっ、本当に紅いや・・・」

まるで映画に出てくるヴァンパイヤみたいな紅だった

顔を洗い、口をゆすいで、ついでに頭も洗っていると、おかみさんがやってきた

「ほら、タオルだよ」

「ありがとうございます」

礼を言ってタオルを受け取り、顔と頭を拭く

「お客さんにこういっちゃなんだけど・・・」

おかみさんが言う

「??どうされました?」

「あんだ、ついでに体も拭いちまいな、ちょっと臭うよ」

繊細な男子高校生の心は、痛く傷ついた

「でも、替えの服がないんです」

「見りゃわかるよ、私の旦那の服を貸してあげるよ」

おかみさん、助かります！

少し（実際にはかなり）ダブダブな服を貸してもらい、そでや裾を折って着る

「しかしあんだも妙ちくりんな服を着てたねえ？なんだいこの袖口？まるで腕ごと引きちぎられたみたいじゃないかい？」

腕ごと引きちぎられたんです

「しかもこの留金、よくこんな精密なもの作ったねえ、あんだどっかの貴族さんかい？」

ただのジッパーです、ユニ　口で買いました

「いや、あっはっはっは」

僕は笑ってごまかした

「それにしても、お腹、減ったんじゃないかい？」

言われて気付く、すごくお腹が減っていた

「どうだい、ちょいと多めに朝飯、作つといたよ」

おかみさん・・・一生ついてきます！

メニューは米とシチュー、サラダにスープが付いていた

見るからにおいしそうなお湯気を立てる料理に、生唾がとまらない！

「それでは、いただきますっ！」

「はいよ！」

おかみさんが苦笑ぎみに言うのを聞かず、ガツつく！

久しぶりのまともな食事だ！

シチューはそれぞれの野菜がとろける寸前まで煮込まれており、野菜本来の甘味と、牛乳(?)の甘味が絶妙に絡み合い、さらにこれに米の食感が相まって想像を絶する程うまい

所々にある肉も大ぶりに切られており、最初に焼いてあるのか肉汁が中にたっぷりと詰まっついていて、これがなんともいえぬうまい！

喉に詰まりそうになりながら、実際に詰まりそうになるとスープに手をだす

こちらはあっさり塩味なのだが、どこか懐かしく、温かみのある味で思わず笑みがこぼれる

サラダも鮮度がいいのか、ドレッシングも最小限しかかけられていないにもかかわらず、シャキシャキした歯ごたえと酸味、食べた後の爽やかさがなんともいえない味をだしている

「そんなに急いで食べなくても、誰も取りはしないよ」

おかみさんがニコニコしながら言うが、しまったこっちゃんない茶碗が空になったのを見て、おかみさんが言う

「おかわり、いるかい？」

僕は無言で茶碗を突き出した

僕は散々食べに食べて、食後のお茶もいただくことにした

「いや〜見事な食べっぷりだね！作った甲斐があったってもんさあ」

おかみさんが呆れまじりに言う

「いや、本当においしかったんですって、特にあのシチュー」

「あれはうちの宿特性のシチューでね、昔はアレを食べるためだけに来た客もいたんだよ」

そういつて笑う顔に、どこか影があるのが見て取れた

「そういえば、他のお客さんは・・・？」

不思議に思っていたのだ、起きてから一度も他のお客さんに会っていないのだ

それに、おかみさんは僕に付きつきり、他に仕事もしていない
おかみさんはどこか寂しげに言う

「そりゃあんだ、こんな村に来る物好きは、そうそついなによ」「
いまいち話が見えなかった僕は首を傾げた

「昔はよかつたさ、ライドに行くには絶対にこの村を通っていった
からね、そりゃ宿も必要になってさ、毎日忙しくしてたもんだよ」

僕は疑問を口にした

「何か、あつたんですか？」

おかみさんは驚いた様子でこちらを見て、言った

「何があつたつてあんだ、ライドが滅んだんだよ、おまえさんも知
ってるだろう！？」

そうだった、僕はこの世界の常識がないんだった
そんな時はやっぱりこれだよな！

「僕、記憶がないんです・・・」

伝家の宝刀、記憶喪失！

そして僕はおかみさんに、嘘とほんとをませこぜにして伝えた

- ・ 気付いたら森の中だったこと
- ・ 怪物に襲われたが、命からがら逃げたしたこと
- ・ 川沿いに歩いていて、橋を見つけたこと

怪物を倒したことで、腕が生えてきたことは伏せた

「はええ〜、あんたも苦勞したんだねえ〜・・・」

おかみさんは目を丸くしたが、特に詳しくは聞いてなかった

「なんだい、じゃあ今この村が、人間が住んでる地区の一番端の村だっけとも知らないのかい？」

うん？どういふこと？

おかみさんの在り方（後書き）

できるだけ毎日更新を心がけていますが、これってやっぱりなかなか辛いですね

他の方がすごい長い間してるのを見てたので、頭が下がる思いです

しかし、一度走りだした以上は完走を目指します！とりあえずは主人公が無双するまで毎日・・・できたらいいな

燃えあがれ！俺の小宇宙コスモ！！

取り繕いの在り方（前書き）

前に200人以上が見てるといったな、あれは嘘だ（コマンドー風に
多分ですが正確には70人以上だと思えます、間違えた、恥ずかし
い・・・／／／

取り繕いの在り方

おかみさんに聞いて分かったことをまとめると、

- ・世界は今、魔物に侵略されて、人が住める場所が限られている
- ・ライドというのはこの村の隣にあった国（街？）で、少し前に滅ぼされている

- ・今残ってるのはイーアという国だけ

- ・橋の方に行くとイーアがある

- ・昔はそれこそ、大陸中に色々な国があつて、人がたくさん暮らしていた

- ・魔物の侵略は、200年ぐらい前から起きたんだ

こんな感じだ

「そうなんですか、200年前より以前には魔物がいなかったんですか？」

「いや、いたよ、ただ好んで人を襲ってくるのはそんなにいなかったって話さ、それが徒党を組んで襲ってくるようになったのがだいたい200年前なんだとさ」

うーん？何が原因なんだろう？

「中には魔物をまとめる魔物の王が生まれた！って言うてる人もいるけど、実際に見た人はいないそうだよ」

・・・もしかして、僕が呼ばれたのってその魔王を倒すため、とかじゃないよね？

「まあ何にせよ、この村ももうお終いだろっねえ、住人はみ〜んな

逃げちまったし、残ってる連中も、覚悟の上さ」

・・・僕が、魔王を倒せるかも、なんていったらどんな顔をするだろう？

「なんだい人の顔をジツと見て、いくら美人だからってそんなに見るもんじゃないよ」

いや、流石に年齢差が、ゲフンゲフン

「とにかく、あんたも早いとこ逃げた方がいいかもね、いつ魔物が襲ってくるか分かったもんじゃないよ」

「そのために、儂がおるんじゃがな！」

いつの間にかいたおっさんが、話に割り込んでくる

「なにいつてんだい、あんた一人でどうにかなるなら、国が滅びたりするもんか」

「じゃがこの村一つくらいならなんとかなるじやろう、期待せずに見ておれ」

おかみさんが胡乱な目でおっさんを見て、おっさんが快活に笑う

「仲のいいご夫婦なんですね」

僕はポツリと呟いた

おっさんとおかみさんが目を合わせる

「だそうだが、どうじゃ、儂と一緒にになるか？」

「冗談でもよしとくれよ、私には旦那も息子もいるんだよ」

「え、夫婦じゃなかったんですか」

「誰がこんなボケオヤジと」

おっさんはまた笑っている

「それにこのオヤジにも子供と奥さんがいたはずだよ」

「いたってことは」

「・・・儂は、生まれも育ちも、ライドなんじゃよ」

・・・沈黙が生まれた

「なに、今の世の中よくある話じゃ、気にすることはないぞ？」

おじさんは、笑顔のまま言う

「あゝすまん、なんじゃ、そうじゃ、おま、名前は何とらうんじゃ？」

「僕の名前は」このまえ命みことです、ミロトと呼んでください

「儂の名前はダイジじゃ、よろしくの」

「あれ、あんた、記憶喪失じゃなかったのかい？」

あ、やつちゃった・・・？

「記憶喪失じゃと？」

「あつはつはつは、名前は覚えていたみたいです」

その後、ダイジさんにも自分の状況を説明する

「ほ、だから魔物の特徴も知らなかったんじゃな」

「そうなんですよ」

「ではなんで、自分の瞳を黒だと思っと思ったんじゃ？」

痛い所を突かれた僕は、必死に頭を回らせる

・・・そうだ！

「いや、だってダイジさんの瞳が黒かったから、同じだと思って」

・・・く、苦しいか・・・？

「ふ、ん、まあいいわい、とにかく、魔物の特徴は知っておいて損はない、聞いておきなさい」

そういつてダイジさんは魔物の特徴を話し出した、以下まとめ

- ・体色は黒っぽいのがほとんどだが、あまり統一性はない
- ・最大の特徴は目が紅い事
- ・体形においては多種多様で、これによって判別することは不可能

- ・ 絶命すると、特別な例を除いて気体になって消え失せる
- ・ 人を執拗に狙う物が多い
- ・ 血液や肉体は猛毒で、口に入れてはいけない

「気体にならない特別な例ってというのは・・・？」

「ああ、それは実際に見た方が早いんでないかのう？ところでお主、金は持つとるか？」

あ、そういえば宿代どうしよう・・・！？

「お、おかみさん、どうしましょう！？僕一銭も持ってませんよ！？」

「ああ、宿代の心配をしてるのかい？いいよツケで、どうせ最後の客だしさ、気にしなさんな」

「そういう訳には・・・！そうだ、僕、力には自信がありますよ！力仕事は任せてください！」

「いや、そういわれてもねえ」

「ほう、力に自信があるのか、ならなおさらだ、どうだミコト、ちよっと付き合わないか？」

ダイジさんに言われて、僕はとりあえずついていく事にした宿を出ると、昨日は見れなかった街並みが広がっていた左右に幅の広い道が続いていて、その両隣に宿が並んでいる所々、酒屋や問屋があつて、ここが宿場町だというのが一目で分かる光景だった

しかし、そのどれもに活気や人気がない
さっきおかみさんが言っていたことは本当だったようだ

しばらく門の方に歩いていき、脇道に少し入ったところでダイジさんが言った

「僕の家だ、本来は違うのだが、村長の温情でここに住まわせてもらっている」

そういつて入っていった家の中は、イメージと違って清潔感があり、物が理路整然と並べられていた

「とりあえず、お主、武器は何を使う？」

言われても、武器など使ったことがない僕は答え様がなかった

「なんじゃお主、そこは記憶喪失なのか？」

なんだか呆れられてる気もするが、どうしようもない

「とりあえず持ってみよ」

そういつて剣を渡されたが、いまいち構え方がわからない

「駄目そうじゃな、ではこれは？」

今度は槍だけど、結果は同じ

その次は弓を、その次はナイフ、その次は鈍器を渡されたが、どれも結果は同じだった

「これも駄目か、お主、もしや過去に一度も戦ったことがない、なんてことは言わないわな？」

はい、その通りです、とは言えず、黙る

いや、あるぞ、戦ったこと

「い、一応戦ったことはあります、素手で、ですが……」

怪物と戦った時は、確かに素手だった

「素手じゃと？遙か昔はそうだったこともあったと聞くが、……大丈夫なのか？」

「た、たぶん……？」

正直これからすること次第なのだが、この流れからするに……

「まあなんとかなるじやろ、では、森に行くぞ！」

やっぱり狩りなのか！？

取り繕いの在り方（後書き）

これedyouやく主人公の名前ができました！

ミコト君は嘘をついた事があまりないので、ボロでまくってますw

魔物狩りの在り方

僕は今、かご付きの背負子とナイフ、ロープなどが入った袋を渡され、門の前にいる

そこで準備体操を始めたダイジさんに倣^{なら}って、僕も準備体操をしていたのだけど・・・

「よし！では、参るか！」

そういうと、ダイジさんはすごいスピードで森の中に走っていった

「ほら、ついてこ〜いっ！」

そう言われて、慌てて僕も走り出す

「ほっほっほっほっほ〜！」

ダイジさんは僕の想像を遥に越えたスピードで走っており、昔の僕ならすぐに置き去りになっていただろう

正直ダイジさんを侮っていた、もしかしてこの世界の住人はみんなこうなのだろうか？

必死になってついていくが、川沿いを走ると違って木々が邪魔で、なかなかスピードに乗れない

対してダイジさんは、まるで木々が存在しないかの様に、するりと走り抜けてゆく

「どうした？そんなに力んでおると、体力がもたんぞ〜？」

「だったらもつとスピード落としてくださいよ〜！」

いいながら必死についていくこと15分位、ようやくダイジさんが立ち止まった

「ふむ、このあたりでよかろう」

ダイジさんは腕に巻いていたバンダナの様なものを口と鼻を覆う様につけだした

「よいか、魔物がでるような場所では、極力口と鼻を覆わねばならぬぞ」

「?なんでですか?」

「お主、話を聞いておったのか?」

うん、ということとは魔物の特徴と関係があるのかな?

「魔物の血肉は人には猛毒だ、返り血が口に入って死ぬ者も少なくないんじゃないよ」

「だから口と鼻を覆って侵入を防ぐのですね?ですが、傷口からの侵入はどう防ぐのですか?」

「うむ、何故かは知らぬが魔物の毒は傷口に対してはあまり効かないのじゃ、だから、とりあえずは口を覆っておればよいぞ、ほら、袋に入れておいたバンダナを巻くのじゃ」

言われて袋を調べると、ダイジさんと同じような布があった
急いでそれをつける

「よし、では早速じゃが・・・」
魔物狩りか？

「採集を始める！」

・・・どうやら違うらしい

それからしばらくは食べられる物や毒になる物、薬草や有益な物の見つけ方を教えてもらいながら過ごした

「よいか、この薬草は、傷口につけるだけでよい、そうすれば直ぐに傷が治るぞ」

「よいか、このきのこは食べてはいけない、手足が痺れるぞ」

「よいか、緊急時はこれも食べられるぞ、ただし不味いから持って帰る必要はない」

よいか、よいか・・・

そういつて様々な事を教えられる
頭がパンクしそうになりながら必死に覚えていると、ダイジさんが遠くを見つめた

「む、どうやらお出ましのようじゃ」

見ると、狼のような真っ赤な目をした獣が、こちらに近づいて来ている

「とりあえずは見本を見せるとしよう、お主は下がっとなれ」

そういつてダイジさんは一歩前にでた

腰に刺していた刀を抜いて、構える

狼は依然、近づき続ける

そして、狼がダイジさんの一刀一足の間合いに入ると思われる、寸前！

「セイツー！！」

ダイジさんが動いた、初動が全然見えない！

一瞬の内に狼と交差したダイジさんは、攻撃の姿勢を保ったまま、ゆっくりと振り返った

狼の首が殆ど体と繋がってない事に気付いたのはこの時だ
交差の瞬間に放たれた斬撃は、見事狼の首に吸い込まれていたようだ

「この様に、攻撃した後も気を抜いてはいけない、魔物の中には恐ろしく生命力の強い物もある、一瞬の油断が命取りじゃ」

しかし、狼はもうピクリとも動かなかった

「まあ大抵の物は首を刈れば死ぬ、しばらくして少しも動かなければ警戒を解いてもよいぞ」

「すごいです！正直一瞬すぎて何が何だかわからなかったですけど、

とにかくすごいです！」

「お主……まあいいか、と、忘れてはいかな」

そういつてダイジさんは狼に近づいていった

「何をするんですか？」

「いやなに、特別な例を見せようと思ってな」

そういつと、ダイジさんはナイフで牙を抜いて、手に持った

「この様に、必要だと思われる物を刈り取って、それを自分の物だ
と思い込むと」

徐々に狼が、黒い霧の様になって消え始める

そんな中、ダイジさんの手の内にある牙だけが残って、他は全て消
えた

「ほれ、自分の物として残すことができるのじゃ」

そういつてその牙を、僕の背負っているかごの中にいれた

「さあ、採集を再開するぞい！」

そしてしばらくして……

「む、また来おったな」

今度は角の生えた兎の様な魔物があらわれた

「では今度はミコト、お主が相手をしてみなさい」

そういつて、ダイジさんは僕に視線を寄越した

「は、はい！」

僕はかごや余分なものをその場に置いて、一歩前に出た

兎はこちらを見て、様子を伺っている様だ

こちらもどうするか、様子を見てみると、兎が角を突き出しながら飛び掛って来た！

「ヒッ！」

・・・僕は左に飛んで避けた

「・・・お主、やる気があるのか・・・？」

ダイジさんは呆れた様子でこちらを見ている

「だっ、だっって危ないじゃないですか!？」

僕はひたすら避けながら、その言葉に反抗する

「ヒッ！ホッ！ヘッ！フッ！トオッ！」

とにかく避けまくっていると

「ええい！いい加減にせんか！！」

ダイジさんの叱責が飛んだ

「う、うわああ〜っ！！」

僕は叫びながら腕を前に構え、飛びかかってきた兎の角を掴んだ
兎は空中でジタバタもがいている

「うお〜っ！！」

僕は角を持ったまま、その兎を地面に叩きつけた

1回では不安なので、2回3回と連続で叩きつけ続けた

「お〜い、もうよいぞ〜」

ダイジさんの言葉に気がついて、角の根元の方を見ると
兎だった物が付着していた

「ヒッ！！」

僕は腰を抜かしてしまっただが、角を持ったまま、これは僕のだと念
じた

兎が消えていく

「あれ？」

角も消えていった

「ふむ？どうしたのじゃ？ちゃんと念じておったか？」

「え？あ、はい、確かに僕のものだと念じていたはずなのですが・・・」

「ふむ、子供にもできることじゃし、どうなっているやら・・・？」

言外に、子供にも出来る事が出来ないといわれているようで、落ち込んでいると

「いや、そういう意味じゃなくてな、出来ない訳はないんじゃない、ただ、なぜ消えてしまったのか、僕にもわからないのじゃ」

そう言われたので、少し気が楽になった

「しかし、もっとこう、戦い方をスマートに出来んかいな？こっちにまで血が飛んできたぞ」

そういってダイジさんは笑った

そして、僕の初めての、いや、2回目の魔物狩りはこうして終わった

魔物狩りの在り方（後書き）

このあたり、説明回が続いています
矛盾が出来てそうで、ドキドキです

魔法の在り方

そうやって過ごしていて、太陽が真上に登ると、ダイジさんが言った

「よし、そろそろ昼飯にするかの」

「村に戻るのですか？」

「いや、とりあえず、罨を見て回る」

そういつてダイジさんは歩きだした

しばらく歩いていると、ロープで逆さ吊りになった兎がいた

「ほう、それじゃこの兎を昼飯にするかの」

そういつて兎の耳を持ってこちらに渡し、すぐにまた罨を張って歩き出す

今度は木々がなく、少し拓けた場所に来た
そこには、簡単に作られたかまどがあった

「では、兎を捌く、見ておれ」

そういつてダイジさんはナイフを巧みに使い、見る見る兎を肉の塊にしていく

「こんなもんかの？」

そこにはスーパーで売っていてもおかしくない、お肉が出来ていた

「では、薪を拾って来てくれ」

「はい！」

僕は急いで薪を集めた

すぐにもどると、ダイジさんはなにやら料理の下ごしらえをしているようだ

かまどの上には、いつの間にか鉄板が乗っていた

「では、料理をするかの」

そいつってかまどに薪を組み、火をつけれる状態にした

「そういえば、どうやって火をつけるのですか？」

「どうやってって、魔法に決まっとろう？」

なんだ魔法か・・・！？ま、魔法！？

「え、ダイジさん魔法が使えるんですか！？」

「なんじゃうるさいのう、使えるが、それがどうかしたのか？」

まるで使えるのが当たり前のような調子で言うので、もしかしたらこの世界では使えるのが当たり前なのかもしれない
それにしても魔法である、異世界と言えば定番とはいえ、実際に見るのは初めてだ

「ど、どんな魔法ですか！？見せてください！！」

「お、おう、なんじゃかすごく食いつきがいいのう？まあ見てなさい」

ダイジさんは両手をかまどにかざし、呪文を唱えた

『在りし日の炎よ、ここに再び熾^{おこ}れ』

すると、かまどの薪の方から僅かに火の粉が上がり結果かまどに火がついた！

・・・正直シヨボい

「なんじゃ？なんで残念そうな顔をしとるんじゃ？」

「いや、なんとというか、もっとこつ、燃え上がる感じをイメージしていたので・・・」

「まあそういう魔法を使うのもおるが、儂は基本的にはこついったものしか使わんのう」

！いるんだ！そういう魔法を使う人！

顔が笑顔に戻った僕を尻目に、ダイジさんが料理を開始する

「まあ肉を塩で下味つけて、野草を適当に炒めただけ何じゃがな」

そういつていたが、野性味あふれるその料理は、塩も使わなかった肉の炙り焼きより遙においしかった

「ほれ、これも食べなさい」

そういつてとても堅く焼かれたカンパンのようなものを渡された
最初は堅くて味もないが、じつくり噛んでいると、わずかに甘味が
あった

「それは非常食としても優秀なパンでな、森に入る時は常に持つと
るんじゃない」

その後も少し採集をして、村に帰ることとなった

帰り道にて

「しかしお主、魔法については覚えておらんのか？」

「はい、これが全く覚えてません、ですので出来れば教えていただ
きたいのですが・・・」

「うむ、しかし儂は正直な話、魔法にはあまり詳しくないのでな、
村長に聞いてはいかがかな？」

「村長さんは魔法にお詳しいのですか？」

「いや、あの人は何にでも詳しいぞ？だから魔法に関しても知って
るはずじゃ」

そういつた訳で、僕たちは村に着いた後、村長の家に向かう事にした
村長の家は、村を両断する道の真ん中あたりで、左に曲がると正面
にあった

「おーい、村長さん、いらっしゃるかのー？」

「フォッフオッフオッフ、開いとるぞい、入ってらっしやい」

家に入るとすぐにテーブルがあり、その奥に村長が座っていた。村長は顔にいくつもの皺を蓄えており、頭髪も白く、しかし背筋は伸びており、目はどこか神秘的な理性を感じさせた。

「ふむ、お前さんがこの前きた、魔物に見える男の子かい？」

村長のいきなりの言葉にビクツとしたが、失礼がないようにできるだけ丁寧話す。

「お初にお目にかかります、私「シメス命カミと申します、先日からこちらでお世話になっております」

「フォッフオッフオッフ、これはご丁寧に、ワシはこの村で村長をしておるラクシじゃ、よろしくのう」

村長は柔らかい笑顔をたたえながらそう言って、ダイジさんに視線を寄せた。

「して、ダイジよ、何用かな？」

「はい、このミコト、記憶を失っているというので、色々と教えているのですが、魔法については僕は詳しく知らないのです、村長にたずねてはどうかと思い、参った次第です」

「フォッフオッフオッフ、そうか、魔法か、ワシもそこまでは知らんが、知ってる範囲についてなら、話そう、では、掛けられよ」

そういつて村長は僕たちに椅子をすすめた

「では、魔法について話すとするかのう、実は魔法はわからないことだらけなんじゃ」

いきなりの発言に目を剥くが、黙って話を聞く

「皆が皆、当たり前のように使うが、実際はどうして使えるのかわかっていないのじゃ。では何故魔法が使えるか、それは体を例にするとかかり易いかのう、お主は腕を動かす時、どうすればいいかわかるかのう？自分の腕は自分で動かせるのが当たり前で、何故自分で動かせるかはわからんのじゃ、昔犯罪者を実験台にして、それを解明しようとした者もおつたが、腕の中にあるとある線を切ると、その先は動かなくなるといのはわかったが、実際にどうして動くかはついにわからなかった、それと同じで魔法もどうして通常ではありえない、超常の現象が起こるのか、誰にもわからん、しかし、いくつかわかっていることもある、……」

長い、長いぞ、村長の話！

つまり、まとめるところ……か？

- ・魔法は意志の力で使う
 - ・呪文を使うのは、その意志を確固たる物にするため
 - ・よって呪文は使わずとも魔法は使える
 - ・身振りも同様
 - ・使えない者はあまりいない、が、使っても意味がない程威力がない（火もつけられない）人が大体5割ぐらい
 - ・そこに血筋などはない関係ない
- こ、こんな感じかな？

「……、まあ、そんな訳じゃから、魔法はとってもチャーミング

なのじゃ
」

「は、はあ
」

「お主、聞いておったか？」

「はい！ダイジョウブです！」

「ならいいが、これダイジ、眠るでない」

「・・・ん、終わったのか？」

やけに静かだと思ったら、寝てたのか

「では、実際に使ってみるかのう」

そういつて村長さんは指を突き出した

『灯れや灯れ、我が闇を照らせ』

そういつた直後、指からチャッカマンの様に火が出てきた
数秒して、指から火が消えた

「ふう、こんなもんかのお」

「あの、ダイジさんと呪文が違うのですが、違う魔法なんですか？」

「お前さん、ホントに話を聞いておったか？呪文なんて人それぞれ
じゃよ、魔法も人それぞれじゃ、ようはイメージじゃ、イメージ、
まあ人のを真似した方が簡単かもしれんな、実際に起こるといこうこ

とがわかつとるから、イメージがしやすいじゃろ？」

なるほど、では・・・

「灯れや灯れ、我が闇を照らせ」

僕は指を突き出し、村長さんと同じ呪文を唱えた

「・・・あれ？」

しかし一切変化がなかった

「イメージじゃイメージ、体を突き抜ける程のイメージが、現実に変化をあたえる」

もう一度、今度は気迫を込めてっ！

「灯れや灯れ、我が闇を照らせっ！」

・・・何も起こらなかった

「うむ、まあ、使えずとも問題ない、そんな人はいくらでもおる」

村長さんが気まずげに、僕に労りの言葉をくれる

「まあ、なんだ、死ぬ訳じゃないんじゃ、気にするな」

ダイジさんが生温かい目で、こちらを見ている

・・・悔しくなんて、ないヤイ

魔法の在り方（後書き）

ついに来ました、魔法です

しかしここにきて、さらにジジイが倍！若い子が主人公しかいない・

・

因みにダイジは40歳ぐらい、村長は75歳ぐらいだと脳内設定しています

前兆の在り方

それからは朝起きて、体を洗い、朝ご飯を食べて、ダイジさんと森に入り、終わったら宿に戻って夕飯を食べ、寝る前に魔法を試すという生活サイクルが出来ていた

「……よし！」

ようやく魔物を狩るのにも慣れてきた
今はちょうどゴリラの様な魔物の頭を、平手でハジキ飛ばしたところだ

「しかしお主は、本当に異常な腕力だな」

ダイジさんにして、異常だと言わしめる力で魔物を殺すのだが、最近、魔物の血を見ていると、何故だか心がザワつく

キケンだ、キケンだ

と、本能が警告するのだが、魔物の血から、目が、離せない

「おい、聞いておるのか？おい？」

「……！あ、はい！大丈夫です！」

「ならいいんじゃないが……」

平穏な時間が、終わろうとしていた

「ダイジさんたら酷いんですよ」

「それはわかったけど、これ、本当にもらっていいのかい？」

「もちろんいいですよ、僕が持っていててもなんの意味もないですから、もらってくれたら嬉しいです」

「ならいいんだけど・・・」

今僕は森から宿に帰ってきて、夕飯をいただいている

やはり何度食べてもこのご飯は美味しい、今日は魚料理だ

因みにおかみさんがこれ、と言ってるのは僕が森から持って帰ってきた物だ

魔物の部位だったり、食べれる野草だったり、フルーツだったり、時には見かけた動物を狩って持ってきた

せめてもの宿代の代わりだ

「そういえば、おかみさんは魔法、使えるんですか？」

「あたしは使っても意味がない質の人間だから、使えることは使えるけど、滅多に使わないねえ」

「じゃあ料理とかはどうしてるんですか？火を起こす時とか」

「そりゃあんた、魔方陣を使うのさ」

「魔方陣？」

「そうさ、そいつを使えばあたしにだって火を起こすぐらいはできるさ」

「詳しく聞いてもいいですか？」

おかみさんの話によると魔方陣は、

- ・複雑な形をいくつか組み合わせ、意味のある陣を作り出すことで使える魔法
- ・使用者の魔法の素質に関わらず、同じ結果を出すことが出来る
- ・ただし少し気だるくなる

「まあ魔法を使うと気だるくなるのは、当たり前なんだけどね」

「そうなんですか？」

「魔法は意志の力で使うだろう？その意志の力つてのは使った後消えちまうのさ、だから何度も使うとやる気が起きなくなるのさ」

・・・村長の話より100倍分かり易い！

「そうだったのか、僕は魔法が使えないのでわからないんですよ」

「なに、あたしは生まれてこの方魔法なんて5回も使っていないさ、それでも全然生活に支障はないよ、あんたも気にしなさんな」

「そうですよね、ありがとございます！」

魔法の練習してるのバレてたのかな？

その時である

「ミコトさんはいますか!？」

宿に入ってきて、開口一番にこういったのは、僕も何度か見たことがある村の人だ

「はい!ここにいますよ?」

息を整えながら、その人は僕の元に歩いてきて、

「ダイジさんが呼んでます、いつもと逆の門で待ってるそうだ」

そう言った

「あ、はい、急ぎみたいなので、すぐに向かいます」

「ああ、そうしてもらつと助かる」

「じゃあおかみさん、また後で」

「あいよ、気をつけてね!」

ダイジさんが夜に僕を呼び出すなんて、はじめてだ
何があつたんだろう?

・・・嫌な予感がする

僕は急いで門に向かった

門ではダイジさんが待っていた

「む、ミコトか、待っておったぞ」

「ダイジさん、どうしたんですかこんな時間に」

「いやなに、予感がするんじゃないよ、何となくだが」

そこでダイジさんは少し躊躇して、だけでもはっきりと言った

「魔物の襲撃がある気がする」

魔物の襲撃、これによってダイジさんの故郷、ライドは滅びたというその襲撃が、もうすぐ起こるってことか？

「僕は何度か魔物の襲撃を受けておる、その、前兆の様なものがあるのじゃ」

「それって的中率は・・・？」

「・・・１００％じゃ」

言葉が出なかった、数多の国を滅ぼした魔物たちが、今、この村を襲おうとしている

・・・村が滅ぶ？

おかみさんも村長も村人も、ダイジさんも、みんな死んでしまう？

「どつするミコト、今なら逃げれるぞ？逃げたとて、誰も責めん」

「僕は・・・」

僕がどうするかは、決まっていた
みんな、僕を暖かく迎えてくれた

「僕はこの村を守ります、きっと、守ってみせます」

「・・・フン、そう言うと思ったわい」

ダイジさんは、どこか寂しげに、自嘲気味に笑いながらそう言った
「魔物はこの先、つまりライドからこの街道を通ってくるだろう、
数はわからんが、おそらくそんなに多くはない、この村が潰せれば
いいだけの戦力でくる」

「どうしてそんなことがわかるのですか？」

「勘じゃ」

・・・なんとも心許ない

「僕の勘を侮るでないぞ？それだけでこの戦場を生きてきたのじゃ
からな！」

カツカツカッ！つと快活に笑い、ダイジさんは僕を見た

「なに、僕とお主なら、何とかなるじゃろ！」

「またそんなこと言って、だからおかみさんにも相手にされないん
ですよ」

「それはそうと、お主の目、だんだん黒くなってきたな」

「え、本当ですか!？」

「ああ、いつか本当に真っ黒になるかもな」

「やった! そうしたらもう魔物と間違えられないぞ!」

「いや、お主は腕のこともあるからな」

「なんでそういうことを言うんですか・・・」

そうやってくだらない話をしていると、僕の目に何かが写った

「どうやら来たみたいですよ」

「うむ、そのようじゃ」

無数の赤い目が、こちらにやってくる

「準備はいいですか？」

「誰に聞いとるんじゃ」

ダイジさんが刀を抜いて、構えをとる

僕の初めての戦が、始まる

前兆の在り方（後書き）

次回、大暴れの予感！

魔方陣は、ただこういものがありませんよ〜っていう説明です
大晦日、のけものにされて暇なあなたに捧ぐ

襲撃の在り方（前書き）

新年明けまして、おめでとつございます！

これを読んでいる方が、少しでも幸せな新年を迎えられることを祈っております

襲撃の在り方

「うおおおおおおっ！！」

見敵必殺（サーチ&デストロイ）！

僕は見て、即攻撃を繰り返している

適当に手足を振り回していても、当たれば当たった場所が吹き飛ぶのでダメージをあたえられる

魔物は死んでしばらくすると、消えてなくなってしまうので、死体の山は出来ていないが、もし消えていなかったらいくつもの山が出来ていただろう

対して、ダイジさんはすごく静かに佇んでいて、敵が間合いに入ると

・・・スパンツ！！

つと最小限の動きで敵を殲滅する

しかしその動きはあまりにも素早く、また隙がないため体に傷はなくそして何より一撃必殺だ

魔物がタイミングを合わせて襲ってきても、

・・・シュパパパパンツ！！

つとまるで機械の様に両断してしまう

圧倒的な力を持つ僕と同じぐらい、いや、それ以上の魔物を倒している

恐ろしい事に、これを1時間近くずっと維持している

・・・ダイジさんって、本当に人間ですか？

「はあっ、はあっ、はあっ、はあっ……」

「大丈夫か？まだまだ敵はおるぞ？」

「まだ、まだいけます！」

「そうか、もう一踏ん張りじゃ！がんばれ！」

僕は体がうまく動かなくなってきた、精神的にも疲れてきたが、力でなんとか状況を維持している

「後ろじゃ！」

「……ッ！！」

いつの間にか背後に回っていた爪の長いコアラみたいな魔物に攻撃されたが、なんとか反応して、左手でガードする
しかし、頬に僅かに切り傷ができる

「気をつける！背後に敵を回すな！！」

言われなくてもそうするつもりでいたが、集中力が切れてきたようだ

「……ッアア！！」

根性で相手を叩き潰す

危険だ、危険だ、キケン、キケン、キケン

頭の中で、僕の本能と呼べる部分が警告を発するが、無視して闘い続ける

頭が大剣の先のようになったイノシシ型の魔物が走ってくる

「・・・つりゃー!!」

咄嗟に右腕でガードすると、右腕が僅かに切れた!

これまでどんな状況でも傷つかなかった腕と足が、初めて傷ついた

僕は動揺を殺して、左手でイノシシをハジキ飛ばす

もう殺すだけの力を込めることが出来なかった

象のような魔物の体当たりを両手で受ける

「・・・つつつあー!!」

今まで力負けなどしたことがなかったのに、ハジキ飛ばされる

「ミコトオ!!!しっかりせい!!」

ダイジさんが激を飛ばすが、僕は起き上がれなかった

僕の、手足が消えていた

目の前にはまだ無数の魔物たちがいた

このままでは、

死んでしまう！

死ぬ？

こんなところで？

いやだ

いやだいやだいやだいやだいやだっ！！

鳥型の魔物が素早く近づいてくる

動ける範囲には、先ほど頭を握り潰した熊型の魔物しかいない

ハヤクハヤクハヤクッ！

その血が、頭を失った体に大量に流れ出ている

キケンキケンキケンキケンっ！

その血から、目が離せずにいる僕は、唐突に理解した

危険なのは、魔物の血を飲むことじゃない

危険なのは、魔物の血を飲まないことだ！

僕は急いで顎を地面に擦りつけ、バンドナを外すと、熊型の魔物に這って近づく

鳥型の魔物がもうすぐそこにいる、嘴をこちらに向けて、突っ込んできた

熊型の魔物にたどり着き、その死体に歯を立てると同時に、鳥型の魔物の嘴が、僕の後頭部を直撃した

「ミコトオオー！」

ダイジさんの叫びを聞きながら、僕は安堵した

・・・間に合った！

右腕を頭の後ろに回し、鳥型の魔物の、少し僕の後頭部に刺さった
嘴を掴みながら

僕はさらに血を啜る

最初は細く、頼りなかった右腕が、元の、本来の太さに戻っていく
振り向いて鳥型の魔物に噛みつく

生きたまま血を吸われた魔物は、力なくその一生を終えた

今度は左腕が生えてきた

腕だけが異常にたくましい猿型の魔物が、僕の頭を握りつぶそうと
しているが

その腕の元の方を、握りつぶす

そしてまた血を啜ると、今度は右足が生えてきた

一回り大きい狼型の魔物が飛び掛ってくるが

右足で生きたまま串刺しにする

当然その血も啜ると、僕の体は元の五体満足になった

「ミソト・・・?」

「・・・フツ、フハハツ、ハーハハア!!!!」

それどころかとても清々しい気分だ!

何か満たされない物が、今宵、初めて満たされた!そんな気分だ!

そんな最高の気分のまま、僕は魔物の虐殺を始める

元から一方的ではあったが、理性の箍タガが飛んだ僕は、これまでより素早く、殆ど敵を見ずに攻撃を行う

そして折を見ては魔物の血を啜る

「・・・っ!」

ダイジさんが何か言いたげであったが何も言わず、魔物の殲滅に集中する

一方的な虐殺は、さらに速度を増した

「・・・ぶづ、こんなもんかろう?」

「そうですね、もういないんじゃないですか?」

僕等の回りにはもう魔物はいない

いや、いるにはいるが、もう動かなくなったものだけだ

「しかしミコト、どうしたんじゃ？いきなりハジキ飛ばされたと思ったら、狂ったように魔物を蹴散らすから、気でも違えたかと思っただぞ？」

「ハツハツハツ・・・」

「それに僕の見間違いでなければ、魔物の血を啜っておったように見えるが？」

「み、見間違えじゃないですかねえ・・・？」

「・・・、じゃあ何故バンダナが外れておるのじゃ？」

「・・・」

「まあよい、今日はつか・・・っ！何か来おるぞっ！！」

遠くから紅い目が四つ、空を飛んでやってくる

「こやつらは・・・ドラゴン型かっ！！」

それは僕等の4〜5倍以上はありそうな竜型の魔物だった
それが二匹、高速でこちらにやってくる

「クソッ！やっかいなのが来おった・・・！気をつける！やつらはこれまでとは訳が違うぞ！！・・・ミコト？」

僕はそれを見つめながら思った

おいしそうな血の塊が2つ、向こうからやってきた

これまでの血もおいしかったけど、あいつらは何故か、もっとおいしそうだ

・・そうだ、迎えにいこう、そうだ、ソウダ

「ミロト?・・おい、ミロト!」

僕は走り出していた

誰にも分けてやるものか、あの血は俺のものだ

地面を砕く勢いで蹴り、僕は飛んだ

襲撃の在り方（後書き）

本日は連続投稿いたします！一時間後にまたお会いしましょう！

戦闘終了の在り方

空中に飛び上がり、ドラゴンとすれ違う瞬間に、右手をドラゴンの首に突き刺す

いちごにフォークを刺した時の様に、軽く刺さる

「・・・！オオオオオオ！！」

魔物はそれで初めてこちらに気付いた様で、何やら叫び声の様なものをあげる

僕は右手を刺した方のドラゴンの背に乗った

そのドラゴンは、なんとか僕に攻撃しようとするが、首が回らず、噛みつくことが出来ないようだ

そしてそれを見ていたもう一匹が、先に移動して、すれ違いざまに僕を攻撃しようとする

「・・・クツ、ハハハハツ！」

僕は笑ってしまった、こいつらは僕を殺そうとしている
どちらが強者で、どちらが弱者か、わかりきっているというのに！

僕は左足の指先を、足場のドラゴンに軽く刺して、バランスを安定させ、こちらを噛み殺そうとするドラゴンを迎えた

すれ違いざま、口を開いたドラゴンの下顎を蹴り飛ばす

ドラゴンは、下顎を失ってもまだ敵意を失っていない様で、今度は鋭い爪で攻撃しようとしてくる

「もう飽きたな・・・」

そう呟いた僕は足場のドラゴンを蹴り飛ばして、下顎のないドラゴンの頭に近づき、その頭を蹴り上げた

ドラゴンの頭はトマトのように弾け飛んで、辺りに血の霧を発生させた

「ん〜 なかなかいいね〜！」

僕はそれを胸一杯に吸い込みながら、首を無くしたドラゴンを蹴って、またもう一匹のドラゴンに降り立った

足場のドラゴンは門に背中をぶつけて僕を潰そうとしたので、僕は思いっきりドラゴンの首を蹴る

ドラゴンの首はグチャツ！と嫌な音をたてて、殆ど両断された

そして、門に当たって門が壊れると嫌なので、門と反対の上空に向けてドラゴンを投げる

反動によって、すごいスピードで地面に近づくが、少し地面にビビが入る程度で着地

しばらくして首のほとんど繋がってないドラゴンが落ちてきて、そのあと、血の雨が降った

「アハッ！アハハハッ！」

僕は口を開けて、その血の雨を受け止めた

その時僕の目は、紅く、紅く、輝いていた

＼ダイジ side＼

不思議な少年じゃった

出会ったときは魔物かと思ったが、疑ってかかったら大泣きした

その姿を見ていると、故郷に残した息子の姿を思い出した

仕方がないのでまだ唯一やっている宿に案内した

そういえばそのおかみの夫と子供も、もう戻ってこないことを思い出したからだ

一応村長に話しをして、この村にいさせていただくことにした、後日連れてくる事を条件に

話してみると、ますます普通の少年だった

名前はミコトといったが、紅い目をしているので、よくこれまで生きてこれたなと思ったが、過去を聞こうとしたら、記憶喪失だのとまった

会話の節々に矛盾を感じるので嘘なのだとわかったが、聞かれたくないのだろうと、そのことは流した

森で狩りをしていると、とんでもない力の持ち主だということが分かった

なんせ木に掌を当てて、そのまま握り潰せるのだ、普通じゃない

そのことに本人も気づいておるようだが、便利程度にしか思っておらん、そんな馬鹿な

数日前の大きな力の気配に関係があるのかと思ったが、本人は魔法が使えないと言う

絶対に関係があると思ったんじゃが、儂の勘違いだろうか・・・？

村長は、ミコトを気に入ったようだ

まあ元々滅ぶ運命にある村だ、多少のハプニングは受け入れるつもりだったのだろう

その後も色々なことを教えた

そしてミコトもそれをよく吸収した

きっと息子が生きていたら、こんな生活が出来たのかもしれないと思うと、少し胸が苦しくなった

そんな中、あの予感がした、忌々しい魔物たちの侵略の予感だ

ミコトに戦い方を教えたのは、この時に戦力になるかも知れないと思ったからじゃ

じゃが、おそらく生きては帰れまい

僕は何度となく生き残って見せたが、一緒に戦ったものは皆死んでいった

ただ、他の、たくさんの方がいる場所では、ミコトは間違いなく迫害され、殺されるじやろう

ならば僕の最後の我俣、ライドと共に死ねなかった僕が、少しでも魔物を蹴散らして死んでいく我俣に、付き合ってもらおうと思ったんじゃ

もし、一度でも侵略を退けられたら万々歳じゃ

しかし、ミコトは予想より遙に活躍した

何度となく魔物に挑みかかつては、その度魔物を蹴散らした

魔物の血の、むせ返る様な状況の中、決して諦めず、何度も、何度も

しばらくして危ない場面ができて、もう駄目かと思つたが

前よりもさらに力強く、魔物を蹴散らすようになった

魔物の血を吸い、魔物たちを殺して回る姿は、まるで鬼のようじゃ
つた

そして遂に終わったと思つたとき、奴らが現れた

2匹のドラゴン型の魔物じゃ

儂では？匹相手に相打ち出来るかどうかといった程の強者じゃ

ミコトに注意を促したが、まるで聞いておらず

それどころか、ドラゴンに向けて駆け出しおつた

しばらくしてドラゴンがこちらに向けて飛んできたのじゃが、1匹
しかおらん上に、ミコトが乗っておる

ミコトがこちらに高速でやってきたと思つたら、ドラゴンの死体が
降ってきて

その後、血の雨が降ってきた

ミコトは狂ったように笑い、儂は戦慄した

そして、儂は覚悟を決めた

戦闘終了の在り方（後書き）

いや〜、ついに来ました主人公無双！

正直この作品、これを書きたかっただけですw

いや、まだまだ続けるつもりですけど、この先全然話出来てない（
’・・・’）

まあ何とかありますよね！まだ毎日更新続けるつもりですb

条件の在り方

僕は布団の上で、何もする気が起きず、ボーとしていた
日はもう高く昇っている

いつもならこの時間はダイジさんと森で昼食をとっている時間だろう
ただ、昨日の事を思うと、ダイジさんと顔を合わせ辛いのだ

今、思い出しても、とてもいい気持ちだった

まるで世界が僕の手の中にあるような

全能感、とでも言うのだろうか

この世の全てを思うがままに出来るような

そんな、気持ちだった

腕を振るえば、血肉が飛び散り

足を振るえば、血の霧が出来る

思うがままに出来る命は、腐るほどあった

もちろん僅かな危機感があったが、それが逆に僕をより興奮させた

「まるで、魔物じゃないか・・・」

その姿は、襲い来る魔物の姿と何処が違ったのだろうか

いや、一方的に相手を殺す僕は、もしかしたら魔物よりも・・・

コンッコンッ

そんな事をつらつらと考えていると、ノックの音がした

「いるのかい？入るよ？」

「はい……」

おかみさんが部屋の中に入ってきた

「どうしたんだい？しみつたれた顔して」

「いや、ハハハ……」

力ない笑い声が漏れた

「昨日は大変だったみたいだねえ、まさか本当に魔物の侵略を止めちまうなんて、正直今でも信じられないよ」

おそらく魔物の侵略と、その撃退の噂はもう村中に広がっているだろう

小さい村だし、隠すこともできないだろうし、その意味もない

「いや、ダイジさんが頑張ったから」

「それにしたって、たった二人で、片方が頑張ってどうにかなることじゃないだろう？」

「それは、そう、ですけど……」

おかみさんが焦れつつそうに言った

「何を塞ぎ込んでるのか知らないけど、あんたはこの村の英雄だよ」

英雄？この僕が……？

・・・少し、元気がでた

「ありがとうございます」

「感謝をするのはあたしの方さ」

おかみさんが苦笑した

「とにかく降りといで、ご飯作ったから」

おかみさんについて、1階の食堂スペースに降りた
そこには暖められた特性シチューと、他にも色々手の込んだ料理が
並んでいた

「さあ、好きなだけお食べ！」

僕はいただきますをすると、料理に手をつけた
どれもこれも、とてもおいしかった
食べたすと、止まらなくなった

昨日は体をよく動かしたのだ、お腹が減っていないはずがなかった
暖かい料理とおかみさんの心に、涙が出そうになる

「じちそうさまでした」

僕はほとんどの皿を空にして、手を合わせた

「相変わらずいい食べっぷりだね」

「いや、やっぱり美味しいですもん」

「そりゃよかった」

いつものやりとりをして、少し気分が上に向いてきた

「それじゃ、行ってきます」

「はい、行ってらっしゃい」

そうだ、ダイジさんだって、何事も無かったかのように迎えてくれるかもしれない

(今日は遅かったのう？まあ昨日は大変じゃったからな)

とかい言って、また快活に笑ってくれるかもしれない

僕は門までの道を、何人かの村人に声をかけられながら歩いた

門の前にはダイジさんが、いつも通りに立っていた

「む、遅かったな、ミコト」

そして何事もなかったかの様に、僕に声をかけた

「すみません、寝坊していました」

僕は心の中で安堵しながら、思わず嘘をついた

「まあいいわい、とりあえずなんじゃが、話がある」

心臓が止まるかと思った

「話、というのは？」

「なに、昨日のことじゃ」

「何か、あったんですか？」

「いや、ミコト、おまのことが」

「それは、……僕が魔物の血を吸っていたことですか？」

「……、……そうだ」

「何か、問題がありますか？」

「いや、まあそれだけじゃないんじゃないよ」

「と、いって？」

「お主をここにいさせることを村長と話した時、一つ、条件をつけられたんじゃない」

「・・・条件ってなんですか？」

「僕はこれでも腕が立つ方だな、大概の魔物には勝てるのじゃ、村長もそれを知っておる、そこで、ミコト、お主をこの村におく条件じゃが」

「・・・」

「僕がミコトを監視する、というのとじゃ、しかし、昨日の戦いではっきりした、僕ではお主を倒すことができない、じゃから」もう

「います」

「……います、つまり、僕に、僕に……っ」

「……そっぴご、お、」

「この村から、出てってくれんかのう？」

「

「ねえ神様、もしいるのなら、
どうして僕がこんな目に遭うのか、
教えてくれないか？」

条件の在り方（後書き）

誰が2話だけと言った、今日は3話連続だぜえ〜！！（爆）

すいません調子こきました、大丈夫です、反省しています。

ミコト君、かわいそう

ほんと、こんな運命にするのは何処のどいつだいい〜？

あたしだよ！！

ガキ使は相変わらず外しませんねw

いや、大丈夫です、反省してます、いやほんと、あsdfj1

旅立ちの在り方(前書き)

お気に入り登録が10件になりました！ハレルヤ！！
ありがとうございます！今後もどうぞ、よろしくおねがいます。

旅立ちの在り方

「そうです、・・・か」

「なに、別に今すぐという訳じゃない、準備として2、3日ならいてもよい」

「わ、わかりました、それじゃあ今日のところは、宿に戻りますね」
「？」

「ああ、それがいいじゃろう、今日はゆっくり休んで、明日準備するといい」

「そう、ですね、それじゃあ、また」

「ああ、またのお」

僕は宿に向かって歩き出した

下を向いて、必死に泣きそうになる顔を隠した

声をかけようとした村の人には、体調が悪いと断って

そうやって宿に着くと、おかみさんが2階から降りてきた

「あれ？どうしたんだい？もう帰って来たのかい？」

「は、はい、今日は休憩だそうです」

「そうかい、夕飯はどうするんだい？」

「き、今日はいいです」

「そうかい・・・ゆっくり休みな」

きつと僕の様子から心情を察したのだろう、おかみさんは必要以上に声をかけてこなかった

部屋に戻ってベッドに倒れこむ

僕が外に出ている間にシーツを替えてくれたのだろう、清潔な匂いがする

僕はそのまま、声を押し殺して泣いた

何故なんだろう、どこで間違ったのだろう

血を吸わなければよかったのだろうか？

しかしそれでは死んでいたし、魔物の攻撃で村は滅んでいたかもしれない

じゃあ戦わなければ？

しかしダイジさんだけで、あれだけの魔物を退治出来ただろうか？
少なくとも最後の2体は、無傷では済まかっただろう

僕がこの世界に来たのが間違いだっただろうか？

それこそ、どうしようもない

もういつそ、村を無茶苦茶に壊してしまおうか？

・・・ダメだ、出来る訳がない！

でも、このまま魔物の血を吸い続ければ、いずれは・・・

僕はやはりこの村にいない方がいいんだろう

そういつた事をグルグル、グルグルと考え続ける

何故ダイジさんは僕に優しくしてくれたのだろうか？

最初から魔物として扱ってくれれば、こんなに胸が痛まずに済んだのに

何故おかみさんは僕なんかを泊めたりしたんだろう？

そうしてくれなかったら、もっと旅立ちは楽だったのに

何故僕はここに留まること選んでしまったのだろうか？

なぜ魔物の血を吸わなければ、手足は維持出来ないのだろうか？

何故？なぜ？なぜ？・・・

・・・答えは、出なかった

いつ、どんな状況でも、朝は平等に訪れる

また、日が昇ってきた

散々悩んで、考えて、結局なんにもなんなかったけど、少しだけ気持ち落ち着いた

明日、出発しよう、また辛くなる前に

1階に降りると、おかみさんが受付に座っていた

「あらおはよう、酷い顔だねえ、さつさと洗ってきた」

「そんな、いきなりの発言で酷いのはどっちですか」

おかみさんが寄越したタオルを受け取りながら会話をする

・・・このやりとりも、明日の朝で最後だ

僕が井戸で顔と、ついでに体を洗って戻ると、暖かい朝食が待っていた

ご飯と、ハムエッグと、スープと、サラダと、漬物と、果物のジュースだ

僕はいただきますをして、食べ始める

やっぱり今日もおいしかった、普通の定食なのに、何故だろう？

前に聞いたら、

「愛情だよ」

と、答えが帰ってきた

満更嘘でもないのかもしれない

「ごちそうさまをして、おかみさんに向き直った

おかみさんに、最初に伝えなければいけない

「おかみさん、俺、明日この村を出発します」

「・・・そうかい、そりゃあ寂しくなるね」

「でも、おかみさんとのこの宿のこと、絶対忘れません！」

「ははっ、そうしてくれるとうれしいねえ、今夜は忘れられないように、より手をかけて料理するよ」

おかみさんは少し涙ぐんでいた

「あゝやだやだ、歳をとると涙もろくてねえ」

「おかみさん・・・」

僕も、つられてまた泣きそうになった

「そうだ、あんた旅の準備は出来てるのかい？」

「いや、これからしようかと」

「なら丁度いい！手伝ってやるよ！」

おかみさんはそう言うと、僕を連れて村を回った

回った先の村人は、事情を聞くと快く協力してくれた

何故これほど協力してくれたのか、おかみさんに聞くと

「あんたが森から持ってきたもん、みんなに分けてやったのさ」

どうやらおかみさんは、僕が持って帰ったものを、村のみんなに僕の代わりだといって配って回ったそうだ

段々と村の人が優しくなってきたのは、そういう理由があったのだと、この時初めて気付いた

テント、寝袋、ナベ、リュックサック、燃料、火打石、水筒、コート、いろいろ旅に必要な物をもらった

火打石は行商人から珍しいものとして買ったとか何とか

そうしている内にあっという間に夜になり、おかみさんの最後の夕食をいただくことになった

昨日に続いて、さらにグレードが上がった気がする料理は、どれももはや芸術的な出来栄えだった

特性のソースがかかった鹿のもも肉のステーキ、マカロニと野菜がたくさん入ったグラタン、骨まで溶けるほどじっくり煮た魚の煮付け、黄金色のスープ、香り高いリゾット、甘くとろけるようなフルーツ

どれもが全て、極上の味わいだった

僕は食べた、食べた、食べまくった

お腹に余裕がなくてもまだ入った

隠し味の愛情が、どの料理にも溢れていた

「こんなおいしいものを食べたのは、生まれて初めてです！」

「記憶喪失の人の意見じゃ、当てにならないねえ」

そう言っつて、おかみさんは笑った

その夜は、思いのほかぐっすりと眠れた

朝起きて、顔を洗い、朝ご飯を食べて、荷物を持って受付の前に立つ

「本当に行くんだねえ」

「ええ、行かなくちゃいけませんから」

「……止めはしないよ」

「・・・大丈夫です、僕は、きっと大丈夫です」

「そんな顔じゃ、信用できないね」

そういつておかみさんは包を僕に渡した

「昼にでも食べな、簡単なものだけど、少しは足しになるだろう？」

正直僕の今の顔は決壊寸前で、見られたものじゃないだろう

「ほら、行きな！戻ってくるんじゃないよお！」

おかみさんの声も、どこか頼りなかった

僕は宿に一礼して、門に向かって歩き出した

道の節々に、村の人たちが見える

みんな、僕を送っていた

門にたどり着いた

ダイジさんがいるかも、と期待をしていたが、どうやらいない様だ

そのまま行こうとして、声がかかった

「ミコト、これを持っていけ」

その声は、間違えなくダイジさんの声だった

僕が振り返ると、ダイジさんが、森に入るときに貸してくれた物を一式持って立っていた

「い、いいんですか？」

「ああ、いいから持っていきなさい」

僕はそれを受け取って、いつもの様に装備した

僕はもう、我慢できなかった

一筋、涙が溢れた

「ほ、ほんと、うに、あ、りがと、うございま、した！...！」

「こちらこそ、ありがとうございます、向こうでも達者でな」

そういつとダイジさんは僕の肩を押して、向きを変えて、

「ほら、もう行きなさい」

そういつて背中を押した

僕は途中、もう一度だけ振り返って、深く一礼し、そのまま歩き去った

「絶対に、生き残ってくれ・・・」

そう呟いて、一筋の涙を流した、ダイジさんのことも知らずに

旅立ちの在り方（後書き）

これにて第一章終幕です。

街、村、国、全てが僕を拒絶した

それでも、僕は生きつづけた

石を投げられながら、それでも諦めなかった僕の前に、現れた人物とは……？

次章、黄昏の出会いと結束の心

乞うご期待！

嘘予告です、まあ本文書き終わった瞬間に作ったんでw

全くの嘘かっていうと、そうじゃないんですけどね、なんせ一発書きですから、その時の気分で内容が変わりますから

今日書いた話の別れのアレはリスペクトです、リスペクトって言うておけば大概は許されると思うのです、もしくはトレビュート？
何に対してだよ、って思われた方は気にしないでください
あれかつこいいですよね〜

ある手紙の在り方

ようやく、ようやくだった！

「見えた〜っ〜！」

苦節7日間！ついに僕はたどり着いた！

長かった、長かったよ

隣の村に行くだけだとタカをくくったのが間違いだった

こんなに長くなるなんて・・・

無論、それには理由がある

アレは、村を出て2日目のことだった

〜回想〜

僕は気分よく走っていた、もうすぐ隣の村に着くからだ

おかみさんの話では、間に2ヶ所、広めの野営する場所があり、その次が村になっている

僕は1つ目の野営ポイントを飛ばし、2つ目でテントを張って就寝

よって翌日、つまり今日中には隣の村に着く予定なのだ

そうこうしている間に村が見えてきた

最初は魔物だと思われるだろうが、話せばきっとわかってくれるはず

もし駄目でも、僕には切り札がある！

僕はスピードを落とし、旅人を装って（実際に旅人なのだけど）門に歩いて向かった

そして、前回の教訓を生かし、遠目から話しかけた

「すみませ〜ん、旅の者なのですが〜！」

「おお、どうした！早くこっちへ来い！」

それを聞いて歩き出す

しかし、しばらくして、門番の態度が変わった

「ま、魔物！？この村になんの用だ！？」

「私は魔物ではありません！！隣の村から来ました！」

「ではノウの村は滅んだのか！？」

因みにノウの村とは昨日までいた村のことだ

「だから違いますって！僕は旅に出たのです！」

「しかし、お前、目が紅いじゃないか！」

「そ、それは生まれつきです！」

「そうなのか・・・っ！いや、騙されないぞ！この村に魔物は一歩たりとも入れん！！帰れ！」

くそう、うまくいかなかったか・・・

だが、僕には切り札がある！

「この手紙を読んでください！僕の身元を保証するものです！」

そういつて取り出したのは、蠟で封のされた手紙

村を出た後、森に入る時いつも装備している袋を確認したら、中に入っていたのだ

ダイジさん・・・

「そうやって近づいた所をグサつと「しません！」・・・ではこうしよう、お前が半分こつちに来い、そこで手紙を置いて、2倍下がれ」

何故2倍も・・・しかしこれしか手段がないならしょうがない

「わかりました！」

僕は言われた通り、半分距離を詰め、手紙を置いて大体2倍下がった

「よし！」

門番は手紙に近づき、こちらを警戒しながら、2・3回掴み損ないながら手紙を手にした

そして、門の方に下がっていき、

「誰か〜！字の読める人呼んできて〜！！」

村の方に叫んだ

そういえばこの世界の識字率ってどれぐらいなんだろう？

しばらくして、おじさんが来て手紙の表面を読んで門番に伝える

「おい！この手紙だが・・・」

「どうしたんですか？」

「宛先がここじゃないぞ？」

「は？」

「いや、ここより2つ隣の街だぞ、この宛先」

「・・・え？」

「開けてもいいのか？そうすると手紙の信用がグンと落ちてしまう」

が・・・」

「・・・い、いや、ちょっと待ってください!」

どういうことだ? てつきり隣の村に入るための、口利きの手紙だと思っただのに・・・

「字だけでは誰が書いたか判別は難しいぞ?」

それはそうだろう、しかしここから2つ隣か、まさかライドではあるまいし、どういうことだ?

「・・・とりあえず返していただいてもよろしいですか?」

「うむ、よからう! ただし村には入れんぞ!」

なんとという頭の堅い・・・

「いいじゃないですか! 入れてくださいよ!」

「いや、駄目だ! 魔物かもしれない存在を村に入れる訳にはいかん!」

「どつしても、ですか?」

「どつしても、だ!」

試しに一步近づいてみた

ジャキンッ!!

門番は即座に戦闘態勢に入った

「それでも通りたくば、俺を殺してからにしろ」

・・・これは無理そうだ

「わかりました、村を迂回してもいいですか？」

「それぐらいならいいだろう、ただし、畑を荒らすなよ！」

僕をなんだと思っているんだろうか・・・？

そうして迂回して、そのまま進み、次の村では・・・

「・・・！魔物か、よし、かかってこい」

「違います、魔物じゃありません！」

「どちらにしても、お前の様な不審な存在を、この村に近づける訳にはいかん、去れ」

「せめて何か食料をくれませんか？動物の毛皮ならありますよ？」

「・・・いや、駄目だ、去れ」

前の村の門番より、さらに堅物だった

〜回想終了〜

そうして今、ようやく手紙の宛先の街にたどり着いた

ダイジさん、どういっつもりだったのだろう？

それも、この街に入れば判明するだろう

街が段々近くなってきた

・・・大きい

これまでの村で、ここが街と呼ばれるのも頷ける

門もこれまでよりもしっかりしているし、壁も厚く、高い

これなら多少の魔物が来もビクともしないだろう

僕は、少し遠目から呼びかける

「すいませ〜ん、ノウの村から来た者ですが〜！」

「おお、長旅ご苦労〜！早く来るがいい〜！」

「それなんです、僕の間を見てください〜！」

「・・・！紅い！？貴様、魔物か！？」

「違います、生まれつきです、兎に角、僕の身分を証明する手紙があります！近くに置くので取りに来てくださいますか？」

「お、う、うむ、よからう！」

そうして手紙を門番に渡した

「これは……この街の統括主任への手紙だな、しばし待たれよ！」

そうして、僕はずいぶん長く待たされた

（統括主任室）

コンッ、コンッ、コンッ

「失礼します！本日東門にて門番の任を負っている者です！」

「入れ」

「失礼します、主任宛の手紙を持った紅い目を持つ男がいます、こちらがその手紙です」

……感情を感じさせない、鉄の様な男が手紙を受け取り、差出人を見る

「ダイジ……か、懐かしい名前だ」

そう呟いて封を開け、黙々と読んでいく

「私は仕事を片付けてから行く、お前は門番の任に戻り、その男を待たせておけ」

「はっ！」

静かになった部屋の中、男の口角が僅かに上がる

「紅い目の男とは、つくづく出鱈目な奴だな、ダイジ」

鉄のような男は、火に手紙を近づけて、そして・・・

ある手紙の在り方（後書き）

結構難産でした、
毎日シンドイ、ワタシ、ヤメル、イチニチ、カンカク、アケル
とか言い出すと、多分書かなくなるので、まだまだがんばります
ふるえるぞハート！燃え尽きるほどヒート！！おおおおっ！！！！

街中の在り方

〔統括主任室〕

手紙は、以下のような内容だった

拝啓、統括主任トー・マトン殿

残暑厳しい季節が終わり、過ごしやすい季節に変わる今日この頃、如何お過ごしですか？

私は未だノウの村に止まり、魔物を退治する日々です。

さて、この手紙を届けさせた者、黒髪にグレーの手足の紅い目の男についてです。

その男は私が森に捨てられていたのを拾い、森の奥で隠居する者に預けた赤子です。

名をニノマエ ミコトとつけられました。

なんといっても紅い目となれば、人里で暮らすのは不可能と見て、森に捨てられたものと見ます。

同じ理由で私も一人暮らしの奇特な人に預けたのですが、そのために会うことがなく、酷く世間知らずに育ちました。

里親が死んだため、私がある程度面倒を見たのですが、まだまだ知らないことばかりだと思います。

以前森で狩りをした際、頭を打ってしまったため、さらに記憶の大半を失ってしまいました。

しかしそれ以来、戦闘に関してはこれが仰天する程の力を発揮して、一騎当千の武力の持ち主になりました。

この村で終わらせるのは惜しいと思い、あなたに預けます。

ミコトは温厚で、謙虚であり、また真面目でもあります、どうか、手厚い保護を、お願い申し上げます。

また、酒でも飲みましょう。

敬 具

ライガのダイジより

その手紙を、鉄の様な男、マトンが火にかざして炙ると、裏の面に文字がでてきた。

そこにはこう書いてあった

〈裏〉

よ〜マトン、これを読んでいるということは、まだしぶとく生き残っていたようだな

それでミコトのことだが、本当の所は正体不明だ、いきなり村に来て、記憶喪失などと言っていた

おそらく嘘だ、が、しかし戦闘に関しては間違いない

戦場に放り出してくれれば、勝手に成果をあげるだろう

別に手厚い保護なんて期待しないが、生き延びれる最低限の保護はしてやってくれねえか？

よろしく頼む

〜終〜

それを読んだ後、マトンが手紙に魔法をかけた

『見えざる文字よ、ここに現れる』

すると裏の面に大量の文字が浮かび、元の文は読めなくなった

古典的な暗号の方法だが、実用性があり、昔二人でいた時に話した方法だ

「.....」

マトンは無言で手紙を見つめると、書類の仕事に取りかかった

（東門の前）

・・・いったいどれだけ待たされるのだろう

もうすぐ日も沈んでしまう

僕は門を遠目に見ながら、待たされ続けていた

その間、ロープで毘をつくる練習をしたり、毛皮を干したり、木を素手で削って動物を作ったりしていた

そして、もう寝る準備をした方がいいかな？と考え出した時、その人が現れた

「・・・」

男は無言でこちらに来て、無言でこちらを見て、無言で振り返って歩きだした

因みにこの間全て無表情である

呆気にとられて見ていると、一言

「・・・ついてこい」

とだけ言って、また歩き出した

そのままずんずん進み、門番には、

「この者の身分は、私が保証する」

と言つて、また歩き続けた

・・・大丈夫なのだろうか？

（統括主任室）

「・・・入れ」

そう言われて入ったのは、物がなく、机だけがある殺風景な広い部屋だった

無言のまま椅子に座り、こちらを見て、また一言だけ言った

「君には明日から、兵士として戦ってもらつ」

「・・・はい？」

「これが身分証明の代わりだ、持っておけ、持ち場は南だ」

「えっと、戦えばいいんですか？」

「そうだ」

・・・それで話は終わつたらしく、沈黙が続く

「えっと、ダイジさんのお知り合いですか？」

「そつだ」

「」

こつ、言葉がでない・・・

この紙があれば買い物や宿泊ができるのだろうか？

兵士として戦うといつても、制度はどうなっているんだろうか？

というか、名前も聞いてないんだけど・・・

色々聞きたいことがあるが、無言の圧力に押されて、僕は部屋を後にした

道の途中、出会った人々に、驚愕の眼差しを受けながら歩く

中には目を見た瞬間、腰砕けに転ぶ人までいる

仕様がなからコートを着て、フードを深く被った

・・・まだ暑いのに

街は活気づいており、顔をあげればたくさんの人々が道を歩いているはずである

無論、今は俯うつむいており、確認は出来ない

そこかしこから人の声が聞こえる

物を売る声、商談をする声、笑いあう声、噂話をする声

村とは違い、人がいっぱいいる

チラチラと顔をあげて道の脇にある店を見ると、いろいろな店があるが、一番目立つのは武器屋だ

軽く見ただけで2、3軒あった

そんな中、なんとか宿を見つけた

ベッドの絵が描いてあったので、間違いないと思われる

とにかく休みたかった僕は、受付に呼びかける

「すみません、ここは宿ですか？」

「そうですよ、お泊まりですか？」

「はい、安めの部屋がいいんですけど、空いてますか？」

「はい、空いております、今日の夕食はお付けしますか？」

「できればお願いします」

「かしこまりました、何泊いたしますか？」

「何事ですか!？」

「ま、魔物がっ……魔物が！」

そういつて受付の女の子が僕を指差す

「魔物?そんな街中にいる訳がないじゃないですか、人騒がせな
ね、旅のお人」

そういつて警備隊の人が僕の肩に手を置いた

その拍子にフードが取れた

……目があつた

「……まっ!魔物だ~~~~っ!!!」

あんたもかよ!

街中の在り方（後書き）

はい、全然街中の様子がありません、タイトル詐欺です
この作品にはたくさんありますので、注意が必要です
作者の実力が足りないばかりに・・・

ご一読、ありがとうございます

紅い目の在り方(前書き)

ユニークアクセス10000件突破!

自分が書いた物を、こんなにたくさんの方に読んでいただき、本当にうれしいです!

紅い目の在り方

その後、応援を呼んだ警備隊の男とその仲間に、詰所に連れてこられた

「それで、なんで魔物がこんな所にいるんだ、門番は何をしているんだ」

責任者であろう、歳をとった男と机越しに顔を合わせて話をする

まあ向こうはこっちに向かって話している訳じゃないけど

「だから魔物じゃありませんって！あと、これを読んでください！」

そういつて、あの全然しゃべらない男にもらった紙を渡す

「なんだこれは、」

「僕の身元を証明するものです！」

「ただの任命書じゃないか」

「え？」

「この男を、南の戦場にて、兵士として登用せよ、って書かれてるけど、お前、名前は？」

「この男を命みことです」

「じゃあこれはお前を任命するものだ、日付は明日からだ」

「あの、僕それを身分証明の代わりだと言われて受け取ったのですが……」

「まあ確かに身分を証明できるな、兵士だと」

「魔物じゃないかどうかの証明は……」

「まあ無理じゃないか？それとこれとは話が別だし、ところでお前、ほんとに二ノマエ ミコトか？」

「そうですねっ！僕は字が読めませんし、書いてあることだって今知りました！」

「まあその様子だとそのようだな、とりあえず、南門に行って見たらどうだ？」

そういつて、その責任者らしき男は立ち上がった

どうやら片足を無くしているようで、松葉杖をついている

「どうした？行くぞ？」

「あ、はい」

そうして男と僕は歩き出した

まるで罪人のようにフードを目深に被り、うなだれてついて行く

「そういえば、人型の魔物が街中に現れたと、話題になっていたが、お前が原因か？」

「ああ、多分そうですね、最初はフード被ってませんでしたし、みんな僕の目を見てかなり驚いてましたし」

「・・・いいか、今後街を歩くときは絶対に誰かと一緒に行動しろ」

「・・・何故か聞いても？」

「わかってるんだろう？」

そりゃあ毎回あんだだけ驚かれたんだ、紅い目というのがどれほど異常か身に染みてわかった

「騒ぎになるから、でしょう？」

「まあそれもそうだが・・・」

「？」

「はっきり言うと、お前が殺されない保証が全然ない」

「え、この街ってそんなに治安が悪いんですか？」

「違う、まあいいとは言えんが、旅人がなんの理由もなく殺されるよつなことは、まず無い」

「つまり、僕の目はその理由になるってことですか・・・」

「そうだ、魔物だと思って殺しました、って言われたら誰も責めない、それどころか賞賛される」

「僕は人間ですよ!？」

「そう思ってるのが、お前だけじゃないといいんだけどな」

「・・・」

「まあお前と一緒に行動してくれる者がいるかどうかは別問題だが」

「でも、ありがとうございます」

「? 何故だ？」

「僕を心配してくれたんでしょ?」

男は立ち止まると、無言で抜刀し、僕の首筋に剣を突きつけた

「お前は馬鹿か?魔物を心配する者などいる訳がないだろう?ただ、街中で死体を出されては困る、といってるんだ」

俺の足が何故無くなったか、わかっているんだろう?」

そっいつて剣を鞘に戻し、向き直って歩き出した

「魔物を憎む人間が、この街にはごまんという、それを忘れるな」

そこで会話は終わり、目的地に着くまでは、お互い無言だった

〔南門・内〕

「入れ」

結構歩いてたどり着いた建物に、僕は入れられた

未だフードをとる事は出来ない

そうして一室に前にきて、男は部屋の扉をノックした

コンッコンッコンッ

「失礼する、警備隊の者だが」

・・・反応はなかった

コンッコンッコンッ

「討伐隊隊長殿？」

「あの・・・」

後ろから声をかけられた

声からして女性の声だ

「今隊長は出掛けてますよ？」

「ふむ、では取り次ぎを頼めるかな？」

「はい、副隊長ならいると思いますので、そこまで案内いたします」

僕は興味本位でその女性の姿を見た

軍服を身にまとい、少し華奢だが、それでも力強さを感じる佇まいだ
フードが揺れて、僅かに顔が見えた

瞬間、

ギャギッ！！

瞬間に抜刀し、僕の首を狙って一切躊躇わず、受けたら致命傷であろっ一撃を繰り出した

咄嗟に手を首に添えてなかったら、僕の首は胴体とおさらばしていただろう

「警備隊長殿、今です」

「おい、やめろ、こいつは魔物じゃないらしい」

「・・・何を言ってるんですか、早く」

その目は血走っており、少しでも動いたら即座に殺されそっだ

「ぼ、僕は人間です、目は生まれつきなのです」

「黙れ下郎が、よくも人の言葉を吐きやがったな？ 惨たらしく殺されたくなかつたら、すぐにその手を退ける」

めっっちゃこええ〜っ！ しかも死亡確定ですか！？

「まあよさんか、一旦剣を引け、命令だ」

そう警備隊長の男がいうと、渋々、ほんとうに渋々剣を引いた、今にも殺しそうな目でこっちを見ている

「この男は明日からあなたの部下になる男だぞ？」

「・・・？何を言ってるんですか？ 魔物の体の研究として、検体になる、ということですか？」

「マトン氏の決定だ、覆せんよ」

「そんな馬鹿な！ あのお人がそんなミスを犯すはずがないっ！」

「・・・マトンってあの無言の人の事かな？ すごい人望があるみたいだ

「だが決定は決定だ、人相を覚えて、間違えて殺さんようにな」

女の人が、視線で人を殺せそうな程こちらを睨みつけてくる

「まあもつとも、戦場じゃ何があるかわからんけどな」

それを聞いてようやく殺気が少し収まった

「・・・あれ？ 僕、戦場にでたら速攻で殺される？ 主に味方から

「まあ、いいでしょう、では案内します」

そういつて剣を納め、僕をものすごい警戒しながら歩いていった

僕、やっていけるんだろうか……？

紅い目の在り方（後書き）

私の家の猫（ ）が、いびきをかいて寝る様になった

完全に野性を失っている、拾ってきた当初はそんなことなかったのに

太らせ過ぎたか・・・？

まあ可愛いからいいのだけど、病気が心配だ

もっと運動させた方がいいんだろうか？

軍の在り方

「ふう……」

今僕は、魔物との戦いを終え、木影で休んでいる

「旦那、水、いりやすか？」

「ああ、ありがとう」

そう言っつて水を受け取り、喉を潤す

アレからもう1ヶ月か……

僕はあの後、ダイジさんの育てた男として紹介され、兵士として戦場に立たされた

「ダイジって、あのダイジか!？」「あのライドの生ける伝説、ダイジ!？」「あの不死身のダイジか!？」「あの奇跡の男か!？」
「まだ生きていたのか!？」

そんな感じで皆騒いでいたけど、ダイジさんって何者なんだ？

しかし、だからといって僕がいい扱いを受けることはなかった

……むしろその逆だった

戦場では真つ先に狙われた、僕が最初にすることは、味方から逃げることだ

食事の時は「何故ここに魔物がいるんだ？」となじられ、ゴミや虫を料理に入れられることに始まり、様々な嫌がらせを受けた

散々魔物を蹴散らしても、「まあダイジさんの教え子だからな」で納得され、それが当たり前前に扱われる

さらに味方を助けるのが間に合わないと、「お前はなんのためにここにいるんだ！」と激昂され、飯抜きにされることもよくある

もちろん寝る場所は隔離されている、便所の隣だ

もうだんだん、僕は魔物として生きた方がいいんじゃないかと思えてくる様な仕打ちの数々

だが、一緒にいてくれる奴も出来た

今さっき水をくれた男だ

彼の名前はスーハという

体中に傷跡があり、顔はお世辞にも美形とは言えない

背は低く、力もあまりないが、脚力はある男だ

ところで僕は、昔と変わらず、魔物の部位を持ち帰ることが出来ない

いくら魔物を倒して、その部位を持って念じても、全て消えていく

味方の兵士たちは「やはり魔物だからか」と罵った

そんな中、彼はそれを回収する仕事をしてきている

・・・まあ彼はそれでかなり儲けているようだけど、普通に接してくれるのは彼ぐらいだ

当然、彼も回りに色々言われてるようだが、

「あつしはそんなの全然気になりやせんよ?」

っと全く気にした様子がない

「そんなことじゃ腹は膨れやせんから」

とも言っていた、・・・悪い奴じゃないんだよ、きつと

そんな訳で、戦場では大体この男と一緒に魔物を狩って回っている

ここは南門の外、滅んだ国フォルフに通じる道の始まりの場所

魔物の侵略が、かれこれ10年以上続いている場所だ

「おい、お前、そうその、魔物と同じ目をしたお前だ」

いちいち面倒くさい言い方をするよな、僕の名前ぐらい知っている筈なのに

「はい、なんですか？」

「兵長が呼んでる、ついでにスーハ、お前もだ」

「はあ、あつしもでやんすか？」

僕はもう何度か呼び出しを受けたけど、スーハまで・・・なんだろうか？

僕らは普通の兵より少なくされた食事を終え、兵長のいる部屋に行く

コンッコンッコンッ

「失礼します、兵士のミコトとスーハです」

「入りなさい」

僕はドアを開け、雑多に物が置かれたそんなに広くない部屋に入る

「僕らに対して呼び出しがあったようですが、何かありましたか？」

兵長は顔をしかめて、深いため息をつきながら僕にいう

「ミコト、お前は前回言われた事を覚えているか？」

当然覚えている

「はい、一人で森に消えるのは止める、ということでしたね」

「そうだ、じゃあなんでお前は今日も森に入った？その時間を魔物討伐に向ければ、もっと魔物を狩れるはずだろう？」

それはそうだと思うが

「しかし、休憩としてはそんなに長い時間じゃなかったはずですが・
」

「お前は敵陣の中、森に入る事を休憩、と言うのか？」

「はい」

「おいおい、おかしな事を言う奴だ、自陣に戻って後方待機すればいいだろ？何故そうしない？」

「・・・」

わかってるに決まっている、味方に殺されかねないからだ

「軍というものは規律が絶対だ、それに従がえないのなら、そんな人物はいらない、前日も言ったはずだ」

「・・・」

正論だ、だが、兵の運用としては最悪だ、それをうまく調整するのが兵長の仕事のはずなのに

それに軍規には、別に休憩は自陣でとること、などといった記述はない（はずだ、字が読めないのでスーハから聞いた話だが）、そうになると完全に兵長のさじ加減の話になる

上司の命令には順うこと、という記述は存在するからだ

「それとも何か、人に言えない事情があるんじゃないだろうか？」

「……っ」

実はある、魔物の血を吸う必要があるからだ、自陣に魔物はいない、しかし吸わなければいつ手足がなくなるかわからない

今回は運良く助かったが、今後手足がなくなって生き延びれる保証はない

「……たださえお前を兵としておいてやってるんだ、従えないのなら国に帰れ、ま、もっともお前に帰る国があるかは知らないがな」

もう国はイーアしか残っていない、帰る国などあるはずがないのだが、しかも兵士として雇ったのはマトンさんだ、ほんと鬱陶しい人だ

「ところで、なんであつしが呼ばれたんでやんすか？」

スーハが話を切るために、割って入った

「ああ、スーハ、お前はミコトの後ろについて回って随分たくさん儲けているようだ、」

魔物の部位を持ち帰る事は軍の規律で認められている、ただし、自分が狩った魔物か、狩った人に許された場合のみだ

「お前自身は魔物を狩っているのか？お前も兵として雇われている以上、魔物を狩る事は絶対だ、わかっているだろう？」

「へい、これでも結構狩ってやすぜ？そりゃあそれが仕事なんですから、狩っているに決まっていますじゃないですか」

「そうか、それは結構なことだ、だが、聞くところによると部位を剥ぎ取るのに夢中で、魔物を狩ってるのを見たことがない、という話もあるのでは」

実の所スーハは余り狩りをしない、いや、僕の狩るスピードが早すぎて、剥ぎ取るだけで精一杯なのだ

ただ全くしないと言う訳じゃない、僕が狩り損ねた魔物のとどめを刺したりもする

それを狩ったと言えるかは微妙な所だが・・・

「話はそれだけだ、ミコト、これ以上軍規に違反するなら、給与の事についても考えなければいけない、よく考えて行動することだな」

一応雇われている以上給与が出るが、そんなに高くはない、ただ、魔物の部位を持ち帰れない僕にとっては生命線だ

・・・この人、絶対僕の給与を着服する気だ、僕を部下にしたのもお金を貰ってだという話だ

こっちは命を張っているのに、どうしてこっつも報われないのだろう・・・？

しかしその生活は、予想外に早く終わった

軍の在り方（後書き）

魔物の部位は結構な値段で売れるので、給与が低くても兵に不満はそんなにありません

因みに兵は徴兵された訳ではありません、自主的に兵になってます
命の危険に見合う収入や、魔物への恨みがそうさせるのです

ようやくメインになるはずのキャラがでました、スー八君です
出てくる予定はなかったのですが、このままだと、あまりにミコト
君が不憫なのでw

昔の僕の在り方

僕は今日も戦場にでる

「うおおおおおつっ!!」

しかし本当に、無限に思えるほど魔物がやってくる

僕が狩った数は万を越えているはずなのに、途切れる様子がない

次から次にやってくる魔物の、頭を握りつぶし、首を手刀で切り落とし、心臓を足で蹴り抜いて、僕は今日も生き残っている

「ダンナアっ!左の方に溜まってやすぜえ!!」

「分かった!」

スーハはこういう風に、僕がより多くの魔物を倒せるようにサポートもしてくれる

「ウツヒツヒツヒツヒ、銀貨だ金貨だ」

・・・目的があれなのは、まあしょうがない

戦場は森を、門を中心にして半円100m程切り拓いてあり、城壁から森の間はぐるっと20mぐらい空いている

基本的に魔物は道を通ってくるので、門を守れば問題ない

稀に森から城壁にやってくる魔物もいるが、そういった魔物は城壁の上にいる弓矢部隊が射ち殺す

この弓矢部隊は空からの魔物の侵入も防ぐので、僕等は安心して地上の魔物に集中できる

「っ！」

ただ、未だに僕に矢が飛んでくるのは、きっとワザとなんだろう

僕は矢を左手で弾いて、城壁を睨みつける

いくら暇だからってやっていいことと悪いことがある

しかし、僕に出来ることは睨むぐらいである

「ダンナ！次いきましよう！」

「・・・うん」

そうやって僕は魔物を狩り続けた、そんなある日

「ダンナ、遠征部隊が明日、こちらに来るらしいですぜ？」

「遠征部隊？」

「あ、そうか、ダンナは知らないですよね」

話すのはスーハだけだし、僕にはこの世界の常識がないのだ、その

ことはスーハも知っている

「遠征部隊つてのは、ある程度まとまった戦力を、すでに滅んでしまった国に送り込み、人間の領土を取り戻そうって部隊でやんす」
なるほど、防戦一方じゃなくて、こちらから攻めると言う訳か

「その部隊の人たちが、明日この門で肩慣らしをするらしいですよ」

「……ということは、近いうちに遠征があるってことか」

「さすがダンナ！理解が早い！」

こんな風に褒められると、なんだかくすぐつたいな

「……僕、遠征部隊に入れてもらおうかな？」

「え、ダンナ、遠征部隊に入るつもりでやんすか！？」

「駄目なのかな？」

「いや、万年人員不足だと聞きやすから、大丈夫だとは思いやすけど……」

じゃあなんだろうか？

「知ってるとは思いやすが、遠征が成功したことなんてないんですよ」

そりゃそうだろ、成功していたら、こんなにたくさんのが滅ぶ訳

がない

「すると、必然的に、遠征に行った人は・・・」

ああ、なるほど、殆ど帰って来なかったのか

「そっか・・・」

「だから、どうかそんなこと言わずに、ここに止まってはごじつでやんすか？」

・・・スーハ、僕の心配をしてくれてるんだね

「そっじゃなきや、あつしの稼ぎがあゝっ！」

お金の心配をしているのか、僕の心配をしているのか、少し気になるところではある

「うゝん、まあまた今度考えるよ」

「そっでやんすよ、よく考えて決めるべきでやんす」

「ところで、じゃあ僕等は明日、どうすればいいんだろっ？」

「ああ、そこはいつもと変わらず、戦場で魔物を狩っていればいいでやんすよ、ただ、いつもより大分楽ではありやすけど」

「じゃあ、明日もよろしくね」

「じちらにそ、よろしくでやんす！..」

そういつて、その日は部屋に戻った

僕は自分の部屋のベッドに入った、もうすぐ朝日が昇る時間だ

兵士は、3交代で狩りにあたっている

朝方から夕方、夕方から深夜、深夜から朝方まで、それぞれ交代で討伐にあたる

魔物には朝も夜も昼もないのだ

放っておくと城壁を登りかねないし、うじゃうじゃ密集してしまうため、狩り難くなるそうだ

だから、余り密集しない内に交代で狩るのだとか

その方法でこれまで十数年、魔物を跳ね除けてきたからには、確かな方法なのだろう

あと、僕の戦場での成績であるが、思ったよりは活躍できてない

確かに僕は1人でたくさん魔物を狩れるけど、よくて10人分だ

20人の狩った数には及ばない

だから、僕が戦場に加わったからといって、劇的に戦いが楽になることはなかったようだ

・・・僕が英雄だなんて、そんなことはなかった

そんな事を思っていると、おかみさんの事を思い出した

そうすると、今度は元の世界の事も思い出してきた

僕は、平凡な高校生だった、どちらかというと目立たない、かといって根暗だとかそういうこともない、平々凡々な、普通の学生だった

友達もそれなりにいて、カラオケにいたり、海にいたり、放課後に集まって馬鹿な事をしたり

そこで淡い恋もしたりしてたけど、結局告白できなかつたな

でも、告白しても、僕には不釣り合いだったような気もするから、これでよかったのかもしれない

妹は、無事に高校に入れたのだろうか？

気の弱い子だったから、学校でイジメを受けていないか、少し気になる

・・・これまで考えないようにしていたことが、頭の中を駆け巡る

父さんと母さんは、今頃どうしているだろうか

僕の失踪を、ちゃんと受け止めてくれてるだろうか

ああ、母さんの料理はもう、食べられないんだ・・・

涙が、流れる

何故僕は、元の世界に戻ろうとしないのか

何故僕は、これまで元の世界の事を考えない様にしていたのか

それは、僕の中に、ある確信があったからだ

元の世界の僕はもう死んでいて、生き返ることはない

何故かはわからないけど、僕はもう、この世界で生きるしかないというところが、心の奥底で決定されていたのだ

たとえば、魔法が万能だとしても、それとこれとは別で、もう戻れないのだと

僕の魂と呼べる場所が、感じている

最初は不思議だったけど、今はもう受け入れられる

父さん、母さん、妹、仲のよかった友人たち、みんな、さようなら

僕はこの世界で生きてくよ

この、魔物に染められた世界で

昔の僕の在り方（後書き）

いきなり過去です、脈絡ないな。・・・

でも、人が過去を受け入れる時って日常だったりすると思うんですよ、ええ、勝手に思ってるだけです

はい、ミコト君は元の世界に戻れません、今決めました、うん
別にイジメてる訳ではありません、きつと、たぶん

遠征部隊の在り方

ドンッ！！ドンッ！！

目が覚めた僕は伸びをする

「ん~~~~っ！」

命がけの肉体労働を毎日しているので、体がどうしても固まるのだ
今日は夕方から深夜の討伐なので、時刻はお昼を過ぎたくらいだ

ドンッ！！・・・ドンッ！！

確か今日は遠征部隊の人たちが肩慣らしにくるけど、いつも通りの
生活でよかったよな

しかし、遠征部隊か・・・、この生活を抜け出すには絶好の機会か
もしれないけど・・・

ドンッ！！・・・

・・・さっきから鳴っている音は、僕の部屋のドアを蹴る音だ

トイレに行くついでに皆蹴っていくらしい

目覚ましなどには丁度いいけど、楽しいのだろうか・・・？

ドンッ！！・・・

まあいいか、僕はタオルを持って井戸に向かった

食堂で、スーハに会う

「おはよう」

「おお、ダンナ！おはようでやんす！」

嫌そうな給仕の男から、食事を受け取り席に着く

あまり目立たない角の席が、僕の定位置だ

「しかしダンナは本当に少食でやんすね？人の5倍10倍は動いてるのにそれだけで足りるんでやんすか？」

「それはスーハも一緒でしょ？」

「いや、あつしは色々間食もしやし、ダンナほどは動いてやせんぜ？」

まあ、そうかもしれないな

「ん、まあ昔からあまり食べる方じゃないからかな？」

おかみさんの料理は別だ

「しかしそこまで効率がいいと、もはや神秘でやんす、何か秘訣でもあるんでやんすか？」

魔物の血を飲むことです

「そんなのないよ、体質じゃないかな？」

・・・言える訳がない

「羨ましいでやんすよ、あっしももっと効率がよければもっと稼げるのに・・・！」

本気で悔しそうだ

「給仕さんにもっと多めの量を頼んだら？スーハは別に大丈夫だと思っけど？」

「いやいやいや、これはダンナについて回るための税だと思ってるでやんす、そこまですると本気であっしが睨まれるでやんす」

基準は何処にあるんだろう？

そうこうしている内に食事も終わり、持ち場（南門・外）に入る時間が近づいてきた

「じゃあ行くでやんすか！」

「そうだね」

僕たちは僕たちの持ち場に足を向けた

「これは・・・すごいね」

そこには、これまでの魔物が引つ切りなしに沸いてくる光景と違い、魔物が一匹もいなかった

「まあこんなもんでやんすよ」

スーハは経験があるらしく、当たり前のよう受け入れていた

「ダンナ、行くでやんすよ?」

「行くって何処に?」

「そりゃあもちろん、最前線でやんすよ」

「・・・持ち場を離れる事になるんじゃないか?」

「何言ってるんでやんすか、あつしらは魔物を狩るのが仕事でやんすよ? 門にいないなら、いる場所に行くのも仕事でやんす」

だといけど・・・

「何か、あんまりよくない気配がする」

「?何か言っただでやんすか?」

「いや、なんでもない」

ただ、同時に行かなければならない気もするんだよ・・・

夕日が、僕たちを照らしていた

しばらくスーハと僕は駆け足で最前線に向かった

「しかし本当にすごいね、遠征部隊」

「そりゃあ領土を取り戻そうって連中でやんすから、生半可な人なんていないでやんすよ」

地面には所々、穴があいていたり、焦げていたり、戦いの跡が見られる

「お、あれじゃないかな？」

最前線が見えてきた

「もう少しでやんすね」

僕たちは足を速めた

最前線では、たくさんの人たちが、僕と同じぐらいのペースで魔物を狩っていた

「じゃあ、あつしはまた後で」

そう言って、スーハが森に消える

味方を抜ける時は、スーハが襲われないように、一旦スーハと別れ

るのだ

「それじゃあ、僕も行きますか・・・」

僕が最前線に近づいたその時、ある女性と目が合った

自然な茶髪で目は明るい黄土色、スタイルがよく、遠目で見ても美人だとわかった

（綺麗な人だな・・・）

と、見とれていると、その人がやってきた

（あ、目があったからかな？どうしよう、とりあえず南門の兵士だつて事を言えはいいかな？）

そついつて考えを巡らす内に、今までの経験を思い出す

（あれ？そついえばこのパターンって・・・）

女性は問答無用で斬りかかって来た

「ですよねっっっ！！」

ガキンツ！！

言いながら腕で斬撃を受ける

「・・・」

一撃で腕力の差を感じたのか、攻撃の仕方を変えてきた

キンッ、キンッ、キン、キン、キキンッ、キンッ、キンッ、キンッ、
キンッ、ギンッ！

「ちょ、つと、は、な、しをつ、聞い、て、くれま、せん、かつ！
！」

とても柔らかく、それでいて鋭い斬撃は決して止まることはなく、
次々と連撃を放ってくる

そのどれもをなんとか両手で捌くが、向こうはこちらが攻撃されると不味い、手足以外の確に狙ってくる

(このままじゃ、いつまでも持たないっ！)

しかし、向こうも同じ事を思ったのか、一旦剣を引いた

(よかったっ！)

「僕は魔物じゃ、」

言いかけた所で、引いた剣が、弓矢の様に引き絞られている事に気付いた

(この型は・・・！)

ダイジさんも、何度かこの型からの斬撃を放った、それは最短を最速で切り裂く技

（突きだっ！）

僕は咄嗟に、切先を向けられている心臓を庇った

引き絞られた矢が放たれるように、恐ろしい速度で剣が放たれる

・・・が

（えっ！？）

途中で切先が跳ね上がる

それは心臓を庇う結果、無防備になった頭上に上がり、振り落とされる！

とても柔らかく、美しい、剣技を極めた者の剣だった

一瞬の逡巡の間に、剣が迫る

一秒がとても長く感じる

普通なら今から腕を動かしても、間に合わない

だが、僕の腕は普通じゃない

ゆっくり迫る剣を見つめながら祈る

間に合え、間に合え、間に合え、間に合え！

（間に合えっ！！！！）

結果、腕はなんとか間に合い、偶然にも白刃取りの形に落ち着いた

(・・・はあああ~~~~っ)

こうなつてしまえば、怪力の僕から剣を奪うことはできない

よって話をする猶予があたえられる

・・・はずだった

(・・・っ!!)

背筋を襲つ恐ろしい予感

それは、この世界に来る直前に幾度となく感じた

そう、それは、死の予感！

僕は剣を離しながら、後方に全力で跳んだ

直後、

『燃えろっっ!!』

女性が唱えた呪文により、剣の下に炎が炸裂する

それは、赤く揺らめく、喰らえば即灰になってしまいそんな程高温

の炎

僕が元の世界で想像した

正真正銘の魔法だった

遠征部隊の在り方（後書き）

咄嗟^{とつ}つて、ルビ振った方がいいんですかね？

それ以外も結構色々大丈夫かなって不安になるんですけど、大丈夫
でしょうか・・・

これを読んでくださってる奇特な方は気にしないかもしれませんが、
何かあったら感想いただけるとうれしいです

あと、メインキャラが増えるよ！やったねニコ（ト）ちゃん！

遠征部隊長の在り方（前書き）

PVアクセス数100000突破！

まいごありがとうございます！

遠征部隊長の在り方

全力で後ろに跳んだ僕は、しばらくの空の旅を経験して、地面に降り立った

女性は信じられない物を見た様な顔で、こちらを見ている

(まあ普通死ぬよな)

自分の生存に、若干の疑惑と喜びを抱えながらその女性に呼びかける

「あの、僕は魔物じゃありませんよ！目は生まれつきです」

女性が不審そうな目でこちらを見ている

「ほんとですって！信じてくださいよ！」

女性は戦闘態勢を解こうとしない

(そうだった！)

「スーハっ！いるんでしょ！？出てきて！」

そう僕が叫ぶと、森からスーハが出てきた

「いったいなんでやんすか？早く魔物を狩りやしょうぜ？」

「いや、僕が魔物と疑われてるみたいだから、誤解を解いて欲しくて」

「そんなのいつものことでしょう？気にせず突っ切れればいいじゃないでやんすか？」

それもそうだ、と思いかけて思い直す

「いやいや、遠征部隊の方たちはとてもじゃないけど突っ切れないよ、さつき死にかけたもん」

「なるほどね〜、ダンナでも死にかけることがあるんですね〜」
変なところで納得された

「そこの遠征部隊の方、このダンナは魔物じゃありませんよ？」
そこで女性が初めて話し出す

「お前が魔物の味方じゃない証拠は？」

これは厳しい、どう証明すればいいんだ？

「そうでやんすね・・・ダンナ、あとは頼みました」

「お、おいつ！！？」

スーハ は にげだした

ボク は ヒトリボツチ だ

(これはどうすれば・・・?)

そこで、女性が話しかけてきた

「お前、兵士の格好をしているが、魔物を狩るのか？」

「それが仕事です！」

「ふむ……では後ろを向いて手をあげろ」

僕は言われた通り、万歳をした

「そのままだ」

女性が近づいてきた

そして、僕の首に剣を当てる

「不審な動きをすれば切る、前を向いて歩き出せ」

そう言って女性は、僕が前をむけるように円を描いて後ろに回った

そのまま歩き出す

・・・なんだこれ？

しばらく歩くと、魔物が出る最前線まで来た

「それでは魔物を狩れ」

そう言って女性は剣を納めた

(助かった・・・のか?)

よくわからなかったけど、とりあえず、いつも通りに魔物を狩る

そうして女性の元に戻ると、

「うむ、どうやら君は私たちの味方のようだ、すまなかった」

そう謝った

「え、信じてくれたんですか？」

「信じるも何も君は魔物を狩ったじゃないか、敵の敵は味方だ、魔物を狩る魔物は味方だ、な？」

な？っていわれても、まあ、いいのかな？って、

「だから僕は魔物じゃないですって！」

それからは、普通に魔物を狩って過ごした

スーハも合流し、正にいつも通りだ

ただ、後ろから遠征部隊が迫ってくるのがいつもと違い、若干怖かったけど問題は無かった

日が沈みきると、遠征部隊の人が明かりをつけた

どつやっているかはわからないけど、おかげで夜でも問題なく魔物を狩れる

もっとも僕は、どんな闇夜でもよく見えるんだけど

しばらくすると、

「よ～～～しっ！！演習終わり！！」

そう言う声が聞こえた

どうやら遠征部隊の肩慣らしが終わったようだ

辺りには魔物の死体が転がっているが、すぐに消えていくだろう

というか門が遠いから、僕たちの終わる時間がわからないな・・・

僕はだいたいの近くににいる魔物を片付けて、声の主を見る

それはそれは大きな男だった

身長は2mを越しているんじゃないだろうか？

さらに腕も丸太みたいに太くて、大槌を担いでいる

地面にあいていた穴も、あの人の仕業なのだろう

そろそろと、皆がその人の所に集まる

僕は興味を引かれて、少し遠めに近づいた

「うん？」

向こうも気付いたようだ

「なんだ、一体残ってるじゃねえか」

そういつて一瞬で距離を詰め、大槌を振り下ろした！

「いっ！？」

僕は掌を大槌に向けて受け止める

スドンツツ！！

釘にでもなった気分だ！

下半身が半分ぐらい地面に埋まってる

「へえ、なかなか根性があるな！」

そう言ってもう一度大槌を振り上げる、その時

「隊長！その人は味方ですよ！」

さっきの女性の声だ

「おう？そうなのか？」

隊長の男は大槌を振り落とす事無く、脇に置いた

「こりゃあすまんかった！そういえば兵士の服を着ているな？南門の討伐部隊の奴か？」

「そ、そうですけど」

「いや目が紅いから、てっきり魔物かと思ったぜ、というかお前、魔物なのか？」

「人間ですよ、目が紅いのは生まれつきです！」

「そうかそうか！ところでお前、ウチの部隊に入らないか？」

「なんだか話を通じなさそうな人だな・・・」

「隊長っ！」っと回りの人

「いやだって俺の槌に耐えたんだぜ？こりゃ逸材だぜ」

「しかしっ！」っと回りの人2

「あゝあゝわかったわかった、まあとりあえず仮採用だな」

「え、いや僕の意見は！？」僕が言う

「はっはっは！まあこの後一緒に飯でも食おうぜ？」

本気で話を通じないっ！！

「ダンナ、逃げちゃったらどうでやんすか？」

スーハが言った

「おう？」

そう言っつて遠征部隊の隊長が、スーハを見た瞬間

バツ！！！！

スーハは一瞬で荷物を捨て、飛び退いた

普段滅多に離さない魔物の部位を入れた袋すら、手放している

スーハはいつでも動ける姿勢で、様子を伺っている

隊長はビククリしているようだが、次第に笑い出した

「ハツハツハア！！今日は逸材が二人もいやがる！！さっさと帰って飯にするぞ！」

そう言っつて歩き出した

「スーハ、どうしたんだ？」

「いや、なんでもないでやんす」

どっからどう見ても何かありそうだったが、僕は何も聞かず、門の方に歩き出した

翌日、遠征部隊に強制転属されたことに気付いたのは、持ち場に入っただ後だった

遠征部隊長の在り方（後書き）

戦闘はやっぱりいいですね、サラサラ書けるのでいつもの執筆時間の50%off（当社比）

物語の進行スピードめっちゃ早いです、完結まっしぐら！
でも終わりが見えない！不思議っ！！

転属の在り方

遠征部隊に配属されたと気付いた次の日、僕は自分の部屋にいた
何故なら指示が何も無いからだ

もし指示があるなら呼び出しがかかるはずだし、兵長に確認しても、

「お前はもう私の部下じゃない、よってお前に指示する必要もない」

などと言って取り合ってくれない

・・・どうすればいいんだろう？

コンッコンッ

初めてまともなノックがこの部屋に響いた気がする

「ダンナ？あつしでやんす、いれてくれやせんか？」

「あ、うん、開いてるよ」

「では、失礼して」

そういつて入って来たのは、いつも食堂か戦場でしか合わないスー
八だ

「ダンナ、決めやしたか？」

「何を？」

「・・・そうか、ダンナはもう大分前から腹を決めてたんでやんす

ね

だから何を？

「・・・ならあつしも腹を括りやしよう！最悪逃げ回ればきつと生きて帰れるはずでやんす！」

随分後ろ向きな決意だな、じゃなくて

「さつきから話が見えないよ、何の話なの？」

「いや、遠征部隊の話でやんすよ？ダンナも転属の話、聞いたでしよっ？」

「え、あれって強制じゃないの？」

「そんな訳ある筈ないじゃないでやんすか、死ぬかも知れない事に強制で当たらせて、うまく行く訳ないでやんすよ」

あ、そりゃそうか

「でも、僕は強制だって聞いたけど」

「あゝ、それは転属して欲しい人がそう言ったんじゃないでやんすか？」

僕の回りで転属を願ってる人は・・・スーハ以外全員だな

「なるほど・・・」

「だからあつしはここ2日、悩みに悩んでたんでやんすよ」

「それでここに来たんだ」

「そうでやんす、ダンナと一緒にならきつと生きて帰れるでやんす」

スーハ、そこまで僕の事を信用しているんだね・・・

「それにうまく行けば報酬もでかいでやんすし!」

・・・わかってたよ、くそう

「まあ、僕は転属する気だよ」

「ほんとでやんすか!」

「ここでも、遠征部隊でも、どこでも生きやすいとは言いがたいけど、遠征部隊には大槌を持った隊長さんもいるし、あの女性の人もいるし、味方に狙われることは少なそうかなって」

「後ろから狙われ続けるのも怖いでやんすよね・・・」

「だから、転属するのも悪くないよね」

「よく言った!」

ドカンッ!!

ドアが必要以上に勢いよく開かれた
そこには半分顔が見えない男がいた

「元気だったか？坊主！」

隊長さんだった

「えっ！！？どうして僕の部屋に！？」

「いやなに、紅い目の奴の部屋は何処か聞いて回って教えてもらったんだ」

「いやだから何故！？」

「そういやお前の部屋も手配しないとな！」

「そうじゃなくて！」

「ああ、そうだな！飯でも食いに行くか！」

嗚呼、会話の一方通行・・・

その後、隊長に連れられて食堂に来た

「おう！俺の分は3倍でな！！」

そう言っつて、給仕の人から3倍ぐらいの量を貰う
流石に隊長の前で量を減らすほど度胸はないらしく、僕たちも普通の量を貰えた

「それじゃあ話を聞かせてください」

「そうだな、でもその前に、自己紹介だ！」

は、初めて話が通じた気がする……！

「俺は遠征部隊の部隊長をしているゴウ・ホーク＝ライラだ！ゴウ隊長とでも呼んでくれ！」

「僕はニノマヘ命ミコトです、ミコトと呼んでください」

「あつしはスー八でやんす」

「そうか、では、」

やっと本編に入るか……

「飯を食おう！！」

わかってたよ、うん、わかってた……

暫くご飯を食べながら話をする

「しかし、俺の槌を耐えたのは、どうやったのだ？」

「いや、生まれつき体が強くて」

「ダンナは生まれつきでなれる限度を大きく飛び越えてやすがね」

「ほう、まあいい、スー八と言ったかな？君は何度か見かけた事が

あつた気がするが・・・」

「ああ、あつしは何だかんだで兵士になってから長いでやんすから、何度か見かけていてもおかしくありやせんよ」

「そういえばスーハの傷つてやつぱり戦場で？」

「いや、それだけじゃありやせんけど・・・」

「そうか、あの反応は戦場で磨かれたのだな」

「命がかかってやすからな」

「そういえば隊長さん、どうして僕の部屋に来たんですか？」

「うむ！この筋肉は日々の鍛錬の賜物だぞ！」

「・・・（さつきまで通じていたのに、急に話が通じなくなった）
そんなこんなで食事が終わり、最後にゴウ隊長が話しかけてきた

「ところで、転属のことだが、本当にいいのだな？」

「あ、はい、誘われる前から考えてまして、いい機会かなと」

「そうかそうか！それは結構だ！して、スーハ、君はどうだ？」

「あつしは、悩みましたが、ミコトのダンナが転属するなら悪くはないと思ってやす」

「そっか！ならば二人揃って来るがいい！！面倒な事はこちらでしておく、荷物をまとめたら西門に来い！」

そう言っつて、ゴウ隊長は去っていった

「すごい人だったね・・・」

「そっでやんすね、ああやって隊員を集めているみたいでやんすよ？」

なるほど、突然訪ねて来たのはそういう事か

「スーハは、本当にいいんだね？」

「たった一度の人生でやんす、ここで一花咲かせるのも悪くないでやんすよ！」

「そっか、じゃあまた、西門で！」

「またでやんす！」

そっいつて僕たちは別れた

果たして、門の向こうには希望が待っているのだろうか、絶望が待っているのだろうか・・・

転属の在り方（後書き）

スーハの話し方が安定しない・・・何度「でげす」って言わせそうになったことか

ゴウ隊長ですが、名前を考えた結果、妙にかっこいい名前に
ホークライラって、なんぞ？

どっかのゲームに出てきそうだ・・・もしかして既にいます？

隊長と隊員の在り方

僕は部屋に置いてある荷物を持って西門に行こうとして、思い出す

「あ、そういえば、僕は街を通っちゃいけないんだっただ……」

警備隊長に、街の中を一人で歩くことを禁止されていたのだ
今更それを破ってしまっても、どうということはないかもしれない
が、守った方が無難かもしれない

(となると、選択肢としては……)

1・誰かと一緒に行く

しかしこの誰かが問題だ、スーハやゴウ隊長とはもう別れてしまっ
たし、他に頼る人もいない

2・気にせず街中を歩く

僕は地理がわからないので、もしかしたら迷子になるかもしれない
し、きつと騒ぎになるだろうな

3・行かない

いやいや、これはない

4・別の手段で目的地に向かう

……街中を通らないで西門に向かう方法、一つだけある

僕は、4を選んだ

「すみません、門を通してくれませんか？」

「何を言ってるんだ、ここは一步踏み出せば戦場だぞ？それにその荷物……いったい何を考えているんだ」

僕はフードを取って門番の人を見た

「僕はミコトです、何度も戦場に出ていますから大丈夫です、実は西門に用があつて行きたいのですが、街中を通つて不要な問題を起さないため、外周を通りたいのです」

門番は頷いた

「なるほど、お前の噂は聞いている、まあ大丈夫だろう、通れ」

そう、4番目の選択とは、南門を通つて、城壁の外から西門に向かうという物だ

これなら道に迷うこともないし、人々と不要ないざこざを起さないですむ

魔物がでるのが難点だが、僕なら問題ないだろう

そうして門を通り、戦場を見渡す

今日の当番の人たちが魔物を狩っている

遠征部隊の人たちとあれだけ狩つたのに、まだ止まらないようだ
ただ若干数が少なくなった気がするけど、どうなのだろう？

僕は城壁沿いを歩き出した

ヒュッ

キンッ！

僅かな風切り音がした

僕はほとんど条件反射で防御する

案の定矢が飛んできていた

そちらを見ると、今度は一斉に空に向かって矢が放たれた

その矢はこちらに向けられたものじゃなく、森の方に飛んでいった

何が何だかわからないが、悪い気はしなかったので、手を振ってまた歩き出した

しばらく歩くが、魔物が出てくる様子もなく、もう少しで西門が見えてくる所まで来た

何故なら道がいきなり広くなっているからだ

おそらく南門と同じように、西門も広く切り拓かれているのだろう
人と魔物の姿も確認できる

僕は遠くから、フードを深く被り、目を隠しながら声をかける

「すみません、南門から来たものです、ミコトと言います、西門に
くるように遠征部隊長のゴウさんに聞いてきたのですが・・・」

しばらくして、誰かがこちらにやってくる足音がする

「君があの中の時の紅い目をした男か、顔を見せてくれないか」

言われた通りフードを取って顔を見せる

「覚えているか、君に最初に斬りかかった者だ」

そこには遠征部隊の（敵の敵は味方だ）と言った女性の人が立っていた

体に血がついている所を見ると、どうやら魔物を狩っていたらしい

「はい、覚えてます、もう一度言うけど僕は魔物じゃないですよ？」

「ハハッ、その様子だとしっかりと覚えていてくれたようだね」

しかし綺麗な人だ、女の子にモテるタイプといえはいいのだろうか
スラッとしていて背も高く、物腰も落ち着いていて

そう、宝塚に出てきそうな人だ

「どうかしたかい？」

どうやら不躰な視線を送ってしまっていたようだ

「いや、綺麗だなって」

何を言ってるんだ僕は

「な、やめてくれないか、そ、そんなことを言われても、その、困る」

言われ慣れていないのか、すごい照れてる

・・・ちよっとかわいいかも

「ごほん、とにかく、その様子だと遠征部隊に転属するみたいだね、
ようこそ！歓迎するよ」

そういつて、笑いかけてくれた

もう、これだけで転属してよかったと思えるよ・・・

「と、言う訳で、早速手合わせを願っていたのだが・・・」

何やら不穏な空気が流れ始めた

「え、いや、まずは荷物を置きたいのですが」

「そうか、では、そこら辺に置いて、早速「おい待て、新人に何してんだ」チツ！」

そこにゴウさんが現れた
ていうか舌打ち・・・？

「内側で待つてたのによ、まさか外を回ってくるとは」

「それも鍛錬のためであろう？流石だな！」

「違いますよ、街中だと不要な事件が起きかねませんから、こつやつて外周を回ってきたんです」

「そうか、おれあてつきりスー八と一緒にくると思ってたんだが」

格好良く別れた後に気付いたなんて、我ながらマヌケだな

「スー八とは誰の事だ？」

「誰っておまえ、ミコトと一緒にいた奴だよ」

「はて？誰かいたかな？」

「「……………」」

(もしかしてこの女の人って、)ヒソヒソ

(ああ、バトルジャンキーだ、自覚はないみたいだがな)ヒソヒソ

「おいどうした、二人して声をひそめて、やましいことでもあるのか？」

「「いや、全然？」」

「ならいいが、そうだと手合わせの件だが「そうだとミコト！お前明日配属にあたってテストをさせてもらうからな」チツツ！！」

何これ怖い・・・

「テストなんてあるんですか？」

「そりゃそうだろう？足手まといはいらないからな！まあお前なら全然問題ないだろ」

「そうだな、戦闘に関しては一級品だからな」

「お、お前が人を認めるとは珍しい、なにかあったのか？」

「この人、僕にいきなり斬りかかって来たんです」

「お前は何をやってるんだ、いくら戦うのが好きだからって、相手ぐらい選べ」

「いきなり潰しにかかった隊長にいわれたくはありません」

「なにをつっ!？」

「なんですかっ!？」

隊長たちは言い合いを始めてしまった、だが、それが仲の良さを表しているような気がする

「仲がいいんですね」

「誰がこんな奴とっ!?!」

やはり息がぴつたりだ

明日はテストがあるらしい、どうなることやら

隊長と隊員の在り方（後書き）

彼女もメインキャラです、の予定です
でもヒロインって柄じゃない気もする
むしろ主人公より主人公・・・
まあいいか

猫が突然暴れて顎に傷が！
なんだ？怖い夢でも見てたのか？私がバイオハザードをやっていた
のが原因か？？

テストの在り方(前書き)

総合評価100pt突破!

こんな小説を評価していただき、まことにありがとうございます!

テストの在り方

そんなこんなで部屋を紹介されて、そこに荷物を置いた
部屋はいたって普通で、やはり兵が使っただけあって殺風景だが、こ
れまでよりも幾分か広い気がする
部屋を出ると、あのいきなり斬りかかってきた女性がいた
ここに連れてきてくれたのも彼女だ

「では、次は食堂だな」

どうやら西門の施設の紹介を買って出てくれたようだ

「そういえば、名前を聞いてもいいですか？」

「む、そうだな、・・・レフィと呼んでくれ」

「レフィさんですね、あ、僕はニノクエ命ミコトといいます、ミコトと呼ん
でください」

「ああ、ミコトだな、そう呼ばせてもらおう、ちょうどついたぞ、
ここが食堂だ」

そうやって色々な施設を紹介してもらい、最後に門の前にやってきた

「この扉の向こうが戦場になっているが、私たちは練習で魔物を狩
ってもいいが狩らなくてもいい」

「遠征にのみ、集中すればいいんですね？」

「そうだ、その成功こそが、私たちの最大にして唯一の目的だ」
遠征の成功、魔物からの領地の奪還だ

「本当は手合わせを願いたい所ではあるが、生憎隊長に禁止されている、施設の紹介はここまでだ、私はだいたい訓練場か戦場にいるから、見かけたら話しかけてくれ、君なら歓迎するよ」

そのまま手合わせに持ってかれそうではあるけど・・・

「ありがとうございます！これからよろしくお願いします！」

「ああ、それではな」

そういつて颯爽と去る姿はとても絵になった

・・・向かう先が西門なのは、なんとも言えないが

その後は夕飯をとって、部屋に戻り、眠りについた
大きすぎるノックの音もせず、久しぶりにゆっくり寝た気がする

目を覚まし、食堂に向かい、そこでスー八を見つけた

「やあスー八、おはよう」

「あ、ダンナ、おはようございます」

スー八はまだ、新しい施設になれてないみたいだった

「部屋が広くなってたよ、やっぱり遠征部隊は待遇がいいのかな？」

「そりゃそうでやんすよ、死ぬ可能性が一番高い部隊でやんすから
やっぱりそうなのだろうか

「ところで、僕たちはこれからどうすればいいのかな？なんか入隊
テストがあるとか聞いたけど・・・」

「そうでやんすね、とりあえず訓練場にも行けばいいと思うでや
んすよ、あそこは基本的に遠征部隊しか使わない施設でやんすから」
「そうだね、もしかしたらレフィさんもいるかもしれないし」

「ああ、あの爆炎のレフィでやんすね」

「え、知ってるの？」

「彼女は有名でやんすよ、魔法、剣術、勉強、どれをとっても優秀
で、さらに容姿までいいときますから、そりゃあ有名にもなりやす
よ」

へへ、知らなかった

「だから本人が遠征部隊に入ると言った時は、みんなが引きとめた
そうでやんすよ」

「そうだったんだ、知らなかったよ」

「まあダンナはしょうがないですよ、噂の類はあっしにお任せを」

そういつてスーハがふざけているが、実際本当に頼りになるのだから馬鹿にできない

「ありがとう、頼りにしてるよ」

そういつと、スーハは少し照れた様子だったが、それを隠すつもりだろう

「さあ、訓練場に行くでやんすよ！」

そういつて勢い良く立ち上がり、食器を片付けにいった僕も苦笑いしつつ、後続く

「よし！来たか！それではテストを開始するぞ！！」

ゴウ隊長がいつも通り大きな声で言った

「まずは基礎体力の測定だ！ついて来い！」

そういつて、西門に向かった

西門の外についた

「では、これから俺について走って来い！始めっ！！」

そういつと突然走り出した

「え、ここだと魔物が出ますよ！？」

「遠征部隊たるもの、何時如何なる時に魔物と相対しても動じてはならぬ！それぞれで対処することだ！」

実際魔物が出てもいいように、ゴウ隊長はあの大槌を担ぎながら走っている

この世界には普通の人はいないのか？

「無茶苦茶でやんす・・・」

いた、スーハはきつと普通だ

僕たちは城壁の外周を、南門とは反対の方向に走り出した

しばらく平地を走っていると、前方の森と大地が途切れていた

溪谷になっているようで、向こうの方に同じ高さの大地が見える

「すごい、どうなってるんだ？」

「そついやダンナは見たことないでやんすよね、この街が出来た理由でやんすよ」

「こら！何を話している！」

怒られた

「俺も混ぜろ！」

と思ったら違った

「ダンナはこの溪谷を見たことがないんでやんすよ」

「ほう、そうか・・・だが今は体力測定の中だ、それ、行くぞ！」
そう言うと隊長は森の中に入っていた
僕が足を止めていると声が聞こえた

「何をやっている！ついて来い！！」

ハッと、我に返った

「ここも走るんですか？？」

隊長は森の中を爆走していた
何とかついていくが、やはり走り難いし、何時魔物が出てくるかわからない

「ツハ、ツハ、ツハ、ツハ」

スーハの息が荒くなってきた
僕はダイジさんの後についていった経験があるので、そこまで苦にはならないが、スーハは初めてなんじゃないだろうか？

走ること30分位、門の前に戻ってきた

「ハアツ、ハアツ、ハアツ！キツイでっ、やんすっ！」

スーハは大の字に寝転がっていた

「ほう、ミコト、お前は平気そうだな！大体の奴は息があがるか脱

落するんだが・・・」

「僕は何度か経験があるので」

「そういえば、あのダイジの教え子だとかいう話も聞いたな、あの
人ならそういうことも教えそうだ」

「ダイジさんを知っているんですか？」

「いや、噂で聞く程度だ」

どんな噂なのだろうか・・・？

「いや、しかしスーハ、君もなかなか根性があるようだ、うむ、俺
の目に狂いはなかったということか」

どうやら基礎体力のテストは合格のようだ

「さて、次のテストだ」

・・・スーハ、死んじゃうんじゃないかな

テストの在り方（後書き）

ああ、サブタイトルにカタカナを使ってしまった
出来る限り使わないようにしてたのに・・・

それもこれも前回でゴウ隊長がテストとか言っちゃっから
編集で無かった事にしようか迷いましたが、やっぱりそのままに
します

なかったことにしてはいけません

あ、バトルジャンキーとか言っちゃってましたね、でも戦闘狂だと
生々しいし、うーん、難しい

幕間・スーハの告白（前書き）

この話は「軍の在り方」あたりの話の頃を想定しております
一応番外編扱いです

たくさんの人に読んでいただけ嬉しい気持ちと、
評価をいただいてうれしい気持ちを形にしました

あとは感想だけだな（チラッチラッ

幕間・スーハの告白

あつしはしがいない兵士でやんす、今日もせつせと魔物を狩る生活を続けてやす

そんな日常が変わったのは、あるお人があつしの職場に入る事になつてからでやんす

〈The Great Red hazard〉
ザ・グレート・レッド・ハザード

そのお人は紅い目を持ってやした

そして、その手足は灰色で、尋常ではない力を持ってやした

一度手足を振るれば、魔物がゴミクズのように飛んでいきやした

その人は、皆に疎まれてやした

味方に命を狙われることもしばしばありやす

弓矢部隊が賭けの対象にしていたという話も聞きやす

しかし、懸命に生きてやした

味方が危険に陥ると、急いでやってきて、魔物を蹴散らしやす

けれど誰も感謝しやせん

それでも、何度も何度も助けやす

罵声を浴びせられ、くだらないいたずらをされ、食事を減らされ

それでも尚、皆を助けて魔物を狩りやす

決してサボったりしやせん

・・・正直、理解できやせん

なんでそこまでするんでやんすか

食堂で料理を頭から浴びせられているのを見たことがあります

その男を助けた所も

あつしは、興味本位で話しかけてみやした

「ダンナ、なんであいつらを助けるんでやんすか？いつもダンナに酷い事してるじゃないでやんすか」

「・・・？僕に言ってるの？」

「そうでやんす、ダンナ、金でも貰ってるんでやんすか？」

「助けるって、そりゃ危険な状況になってる人がいたら助けるでしょ？だって僕にはそれができるんだから」

ダンナはなんでもない事のように言ってやした

・・・あっしは感動しやした

ダンナは神様みたいなお人だ！

この人にならついていける！

そう思って以来、あっしはダンナにつき従っているでやんすよ

「スーハ、大事な所が抜けてる」

「どこでやんすか？」

「魔物の部位」

・・・とにかく、ダンナはすごい人でやんす

あっしはダンナについていくでやんすよ！

お金の縁が切れるまで！！

~~~~~

ここまでが、表向きの理由でやんす

あんただから言っんでやんすよ？

ダンナは確かに素晴らしい人で、ついていけばお金が儲かるのも事実でやんすが

ダンナを見てみると、自分がちっぽけに見えるでやんす

魔物一体倒すのにも苦労して、それでも必死で日々を生きてる自分がどうしようもなく駄目な人間に思えるでやんす

正直な話、ダンナに嫉妬したのも一度や二度じゃありやせん

でも、それはあっしが弱いから

あっしが、実際にちっぽけだからでやんす

ダンナは生まれ持った物だと言ってやんすが、命の駆け引きの場では、どんな天才も生き延びるのは至難の業でやんす

ダンナは怪力で、頑丈な手足がありやすが、それ以外はあっしと同じでやんす

・・・そうでやんす、あっしは、ダンナに夢を見てるのかもしれない

自分になりたい自分を、ダンナに重ねてるのかもしれない

ついていけば、いつか、ダンナみたいに、いや、ダンナより大きくなれるかも

こんなちっぽけなあっしが、・・・

そんな、夢を見てるのかもしれないやせん

それがあるから、一緒にいるのかもしれないやせん

まあすくなくとも、しばらくは離れる気はありやせんよ

それに、あんたのことやあの場所のこともあるでやんすからね

・・・この恩を、返すまで

## 幕間・スーハの告白（後書き）

自分の弱さ、小ささを受け入れる強さが、スーハにはあります  
それを認めた上で足掻く姿は、醜く見えるようで、とても尊いもの  
だと思っております

小さき者にエールを

きつとその一歩が、この世で一番大切な物だと思っから

## 特技の在り方（前書き）

幕間を挟みましたが、こちらも通常運行です

## 特技の在り方

「次は特殊技能のテストだ」

特殊技能・・・？

「なに、難しく考えることはない、ないならなideいいが、自分の、人とは違う特技のようなものがあつたら披露して欲しい」

そういうことか、となると僕の場合は・・・

「この岩は壊したりしても問題ないですか？」

僕は門の脇に無造作に置いてあつた岩を指差して聞いた

「ああ、問題ないぞ！」

「では、」

僕は岩に指の腹を力一杯叩きつけた

すると、指が岩にめり込んだ

その際岩が割れてしまったが、まあいいだろう  
そしてそのままできる限り岩を握り込む

そのまま手を前に持ってきて、開く

すると、元岩の砂粒がサラサラと風に流された

「僕は怪力で、とても堅い手足があります」

「・・・ほづ、どれ」

そう言つてゴウ隊長が岩に触れるが、いたつて普通の岩だ

「確かに俺の槌を受けきつた時点で普通ではないと思つていたが、これほどか・・・」

ゴウ隊長は真剣な顔で考え込んでいる  
やりすぎたか・・・？

「・・・フツ、フツハツハツハ！素晴らしい！これなら並の魔物など目ではないな！！」

そう言つて笑つてくれた、助かつた・・・

「ダンナはほんと呆れる程の怪力でやんすね・・・」

スーハも呆れている

「なに、優秀な分には問題ない！」

「後は夜の暗闇でも良く見えますよ」

「そうか！これは本当にいい人材を見つけたものだ！」

ゴウ隊長はしばらく笑い、落ち着いてからスーハに聞いた

「そうだ、スーハ、君は何かあるか？」

「あつしは特にありません、しいて言うなら魔物の剥ぎ取りなら得



意でやんす」

確かに魔物の剥ぎ取りは本当に早い、職人技と言ってもいいスピードだ

「そうか、まああればいい程度なので問題ないぞ?」

そこで場所を移すらしく、訓練場に移動となった

因みに何度か魔物に襲われているが、各々が問題なく退治していたスーハは何故か一度も襲われていないが、きつとコツがあるのだろう

「では、戦闘技術のテストを開始する、が、」

ゴウ隊長がこちらを見た

「ミコトに関しては正直俺でも勝てるかわからん、よってスーハ、君だけだ」

「あつしはたいしたもんじゃありませんぜ?」

「いやしかし、これまでも兵士としてやってきているなら、それなりにできるのだろうか?」

「まあそりゃ、門の前に来る弱い魔物ぐらいなら何とかかなりやすが・・・」

「物は試しだ、レフィー!! ちょっとこいつと戦ってみてくれ!」

ゴウ隊長は奥の方で鍛錬していたレフィーさんと呼んだ

「ちょっと待っててくださいよ！あっしはとてもじゃないが敵かないやせんぜー!？」

スーハはそう言っているが、レフィさんはやる気満々みたいだ  
レフィさんが言う

「いや、別に命のやり取りをしようと言うわけじゃないんだ、少し  
実力を見せてくれればいい、ちょっとだけ、ちょっとだけ・・・」

「目が獲物を狩る目でやんす!！」

「では、始めっ!！」

ゴウ隊長の合図で、試合が始まった

「ヒィ〜〜ッ!！」

スーハは何とか剣を構えているが、どう見ても及び腰で、攻撃しよ  
うとする様子すらない

「ほらどうした、反撃してこい!！」

そういつてレフィさんが打ち込むが、完全に逃げ腰のスーハは剣で  
防御し、後ろに飛んで逃げ、時たま放たれる連撃を何とか躲している

・・・これを試合と呼ぶのだろうか？

「そろそろそろっ!！」

「ヒィ、フウ、ヘィ!！」

連撃を放つレフィさんはもちろんすごいが、それを避けきってるスー八も十分すごい気がする、  
しばらく試合が続き、

キンツッ！！

遂にスー八の剣が弾かれた

「ま、まいりやした！！勘弁してください！！」

スー八はそのまま土下座でもしそうな勢いだ

「ふむ、こんなものか、次はミコト「いや！確かに反撃は出来なかったが、レフィ相手にあそこまで耐えたんだ、十分すごいぞ！！」  
おい」

ゴウ隊長が割り込んだおかげで、どうやら僕は戦わなくていいようだ、助かった・・・  
しばらくゴウ隊長とレフィさんはゴニョゴニョ話していたが、どうやらなんとかなだめるのに成功したようだ  
レフィさんが言う

「しかし、確かに避ける技術は素晴らしい物があった、捉え切れないのは久々だ」

そう言ってスー八を褒めた、褒めた・・・？うん、きっと、たぶん

「へい、あっしは生き残る事に関しては自信がありやすぜ！」

「そうだな！遠征部隊において、生き延びるのも重要な要素だ！生きていなければ報告もできんならな！」

「ところでスーハ、ナイフは使わないの？」

ビクッ！

つと音がしそうな程、スーハが動揺してた

「な、なんのことでやんすか？ダンナ？」

あ、もしかして不味いことを言ってしまったのかな？

スーハは剣を下げてはいるが、戦闘には基本的にナイフを使うそのナイフで剥ぎ取りまでするから都合がいいのかもしれないが、どう考えても剣より使い馴れているはずである

「む、そういえば・・・」

ゴウ隊長が何かに気付いた様だ

「スーハ、お前以前見かけたと思っていたが、酒場でジャグリングをしていたな？」

「ひ、人違いじゃありませんか？」

「いや、間違いない、ナイフを器用に操ってジャグリングをしていたのを覚えているぞ」

スーハ、そんなことをしていたのか  
観念したのか、スーハが話し出した

「それでやんすよ、あっしの唯一の特技でやんす」

そう言つてスー八が無造作にナイフを放つた

すると、側に生えていた木に深々と突き刺さつた

ナイフを投げる動作が早すぎて、よく見えなかつた

これは十分に特技として通用するだろう

「スー八、なんで黙つてたの？」

僕が聞くと、

「これは人に聞かれたらあんまり意味がない特技でやんす」

どうやら、突然投げるから意表を突けるんだとか

しかし、味方に黙っている意味はあるのだろうか？

「ダンナ、敵は魔物だけではありやせん、忘れてはいけませんよ」

そう言つて、黙ってしまった

「.....」

ゴウ隊長とレフィさんも思つところがあるらしく、場に沈黙が生まれた

「しかし、」

レフィさんが言う

「その特技は素晴らしい物だ、出来れば遠征中に使用して欲しいのだが・・・」

「大丈夫でやんす、命がかかる場面で出し惜しみをするほど、あつしも馬鹿じゃありません」

「そうか！それは助かるぞ！！よし、二人とも合格だ！！」

ゴウ隊長が、場の雰囲気吹き飛ばすように大きな声で言う

「今をもってお前たち二人を、遠征部隊隊員に任命する！！」

こうして、僕たちは、遠征部隊の隊員に迎え入れられた  
この選択が間違っていたかどうか、今の僕たちには・・・

## 特技の在り方（後書き）

最近とても寒いです

冬至から2ヶ月後が一番寒いと聞きました

・・・まだ寒くなるんでしょうか？

もう嫌だオソトイキタクナイ

何処が地球温暖化だよ！もっと、暑くなれよ！！（シュウゾウ風）

## 紹介の在り方（前書き）

最近アクセス数が順調に増えてます、総合のユニークアクセスが2  
500人を突破しました！

これが、毎日更新の力か・・・！



## 紹介の在り方

「それじゃあ他の隊員を紹介しよう！」

そう言うと、ゴウ隊長が訓練場にいる人たちに声を掛けた  
全員が集まって来た所で、ゴウ隊長が僕たちに話しかけた

「まずは新人から紹介するぞ！」

そう言って僕たちの紹介を始めた

「こいつらが、遠征部隊の隊員として新しく配属された二人だ」

隊長が、スーハの横に立つ

「こいつはスーハという、これまで南門で討伐部隊の兵士をして  
いたやつだ、剣はあまり得意ではないようだが根性はあるぞ！」

「よろしくでやんす、あんまり戦闘では役に立たないかもしれない  
でやんすが、がんばるでやんす」

次に、僕の横に立って、紹介を始める

「こいつはニノマエ ミコトという、ああ、今噂になっている奴だ、  
皆も知っているだろうが人を襲ったことはないし、魔物を討伐した  
経験もある、戦闘では頼りになるぞ！」

「はじめまして、命イノチです、よろしく願います！」

そういつて、僕たちの紹介を終えると、ゴウ隊長は他の隊員を僕たちに紹介してくれた

「まあ私とレフィは知っているだろうから省くとして、まずはこいつからだ」

そういつて目つきの悪い少年の横に立つ

「こいつはトダという、昔はライドに住んでいた奴だ」

この少年は黒い髪を短く切っており、黒い瞳をしているし、名前からして日本人っぽいけど、ほりの深さや足の長さがコーカソイドっぽい男の子だ

トダは僕を睨みながら言った

「おまえ、どういつつもりかしらねえが、仲間の手えだしたらただじゃ置かないからな！」

声変わりして間もないような声だったが、僕を警戒しているようだ

「人の話を聞いていたか、こいつは人は襲わないぞ！」

そういつて隊長は笑っている

「うん、仲良くなれるかな？」

次は隣に立っている肌の色が黒い、中東アジアの美女といった感じの人物を紹介してくれるようだ

「こいつはフリー・フィオレという、元弓矢部隊の隊員だ、無口だが、人の話はちゃんと聞いてるぞ！」

「・・・」

「よ、よろしく!」

「よろしくでやんす」

挨拶を試みたが、余り表情の変化がなく、眠そうな顔でこちらを見ている

何を考えているかわからない・・・

スタイルがよく、スラッとしているが、女性特有の膨らみが見られる、わかり易くいうと、

「・・・」ニコニコ

レフィさんがこちらを満面の笑みで見ている

ああ、レフィさんはそういうった意味ではさんね「ミコト君?」

「すみませんでした!!」

僕は何故か謝っていた、回りの男性陣は気まずそうに他所を向いてくれていた

皆同じ事を思ってたんだろうな・・・

「ゴ、ゴホン! まあいいじゃないか! 次はこの人だ、名をギラ・レイフォス・チヨウタイという、魔法の得意な気のいいじいさんだ!」

「よろしくのお、若いの」

「よろしくおねがいます!」

「よろしくおねがいするでやんす」

そういつて紹介されたのはヨボヨボのおじいさんだ  
毛という毛が全て白髪で、顔に深い皺が幾つも刻まれている  
長老という言葉がぴつたり的人物じゃないだろうか？  
ただ何処か、掴めない雰囲気がある

そんな感じで次々紹介されていき、一通りの紹介は終わった

「うむ、こんなところか！全員ではないが、あとは各々で紹介してくれ！それでは、解散！！」

そういつてゴウ隊長は、皆を解散させた  
紹介を受けて一つ、気になる点を見つけた  
皆そこまで僕を警戒していないのだ  
討伐部隊で僕は、鼻つまみ者だったのに

ちょっと聞いてみた

「ギラさん、でしたよね？」

「ほっ、どうかしたのかね」

僕が話しかけたのは、ヨボヨボのおじいちゃんだ  
一番話し掛け易かったのだ

「僕はこの紅い目のせいで散々魔物扱いを受けてきたのですが、何故皆さんはこんなに普通に接してくれるのですか？」

「ダンナ、それはちょっと・・・」

いきなり失礼かとも思ったけど、回りくどいのは僕には無理だから、直球で聞いてみた

「ほっほっほっ、そうじゃな、ここは遠征部隊じゃからではないかな」

キラさんはそう言った

「でも、一番魔物を憎んでいる部隊ですよな？」

ちよっと悲しそうな顔をしたが、キラさんは答えてくれた

「そうじゃ、憎んでおる、じゃから皆、人一倍魔物と接しておるのじゃ」

魔物と接しているから、魔物に似ている僕が怖くない？

「魔物はとても素直なんじゃ、ただ人を殺す、それだけの存在じゃ」

キラさんが言葉を選ぶ様に、ゆっくりと話す

「じゃから、出会えば殺し合うだけで、話すことはないし、人を騙すこともない、もっとも、人の言葉を話す魔物もいるという話も聞くが、滅多に会うことはない」

「そうか、僕に敵意がないのがわかるから、皆警戒しないのですね」

「そうともいえる、じゃが、それだけではない」

「と、いいいますと?」

「・・・皆、死を受け入れておるのじゃ、お主に殺されても、皆文句は言わないじゃろうよ」

・・・それは、いくらなんでも違うんじゃないか?

「お主は居場所を求めてこの部隊に入ったかもしれんが、この部隊は基本的に全てを失った者が訪れる部隊じゃ」

そのとき、なんとなく理解した、全てを失った人が、最後に訪れる理由

「ギラ殿、あんまりな事をいうもんじゃない」

レフィさんが話に入ってきた

「ホツホツホツ、もっとも、こつこついう者もおるがのつ」

そう言つてギラさんは去つていった

「そついえば、レフィさんは何故この部隊に?」

「私か? 私はもちろん領土を取り戻すためだ!」

レフィさんは胸を張つて答えた

「いつまでも奪われたままでは気が済まん! 絶対に取り戻すのだ!」

そういうレフィさんの瞳には、炎が映ってる気がした

「熱血でやんすね〜」

「ところでミコト、おまえさっきフーを見た後、私を見て何を思った？」

僕はぎこちなく目を逸らした

あ、スーハが既に逃亡している

「ハテ、ナンノコトヤラ・・・？」

「おい、こっちを見る、オイ」

その後僕がどうなったかは、・・・秘密だ

紹介の在り方（後書き）

暗い！暗いよ〜！！話が暗い！

雑多なキャラ紹介でしたが如何でしたでしょうか？

私は限界です

キャラ考えるの超ムズい、またお爺さん出しちゃったし、女性キャラなんてようやく2人目

おかみさん？

ノーカンノーカン！（腕を上下に振るジェスチャー付き）



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6764z/>

---

魔血吸の在り方

2012年1月14日01時51分発行